

18世紀における北京の都市景観と 住民の生活世界

——康熙六旬『万寿盛典図』を中心に——

熊 遠 報

一、はじめに

数十年以来、画像・情報等の生成・処理技術などの飛躍的な進歩と日常的使用は、人々の世界に対する認識や社会経済生活に大きな変化をもたらしている。社会展開のテンポと人々の生活リズムはますます速まっている現在には、新しい技術を日常的に使用する人々の情報の受容形態と需要も変化している。こうした社会転換の中で、人々は、より分かりやすい知識や情報、特に直観的ものを求める、「生産」する傾向が高まって、物事を認識・理解する際に視覚的・立体的な説明と表現が要求されている。

今まで重要視されてきた紙媒体の書籍等は、主に文字に依存していた。そうした方法では知識・情報を伝達する上で将来にも重要であるが、優れた文字資料は、非常に詳細な叙述があったとしても、符号という抽象的システムを通して意味を表す文字の窮屈さがあり、物事に関して簡潔、かつ立体的に分かりやすく多面にわたる情報を表現するには限界が多い。文字の表意と情報伝達手段としての限界について17世紀の一下層の知識人金埴もすでに明晰な認識を持っていた⁽¹⁾。歴史学研究の中で各時代、特に前近代社会の具体像を描き出す際、今まで主に使用してきた文字文献の限界が大きく浮彫にされ、より直観的な視覚・聴覚資料、即ち現存する実物、実物を忠実に反映した絵、地図、写真など

の画像（音声）類資料が重要な役割を果たすことになる。さらに歴史学の理論と研究方法の開拓も必要になってくる⁽²⁾。

北京は、巨大国家の首都としての歴史が長く、関連した文献資料は膨大であり、学界における研究も多く積み重ねられてきた⁽³⁾。しかし如何に伝統都市北京の社会構造を「分層的」に抽出し、建築、技術、経済と日常生活等の要素を含む都市の立体像を描き出すかは、難しい課題であり、詳しい文字資料があったとしても、文字資料に基づいた叙述は、隔靴搔痒の感もある⁽⁴⁾。

本稿では、文字文献は勿論、画像等の資料も用いて、伝統都市の社会経済構造を探る一環として、18世紀における北京の立体的な都市像を再構成する試みを行いたい。具体的には、主に康熙55年（1716）に出版された康熙六句『万寿盛典図』を基本資料にし、乾隆15年（1750年）に製図された『乾隆京城全図』、乾隆57年（1792年）に出版された『乾隆八句万寿盛典図』および現存する伝統建築、施設等を参照しながら、北京の一部の地域の景観を描き出し、画像資料から都市住民の日常生活の一端を明らかにしてみたいと思う。

二、『万寿盛典図』の成立

1、明清以来の北京に関する画像資料

北京の景観を描いた絵図の中には明清時代のものが複数存在している。明代後期の『皇都積勝図』、万暦年間の『北京城宮殿之図』、康熙55年の『万寿盛典図』、乾隆57年の『乾隆八句万寿盛典図』、康熙帝『南巡図』の一部、乾隆年間の徐揚『京師生春意図』などがある。

『皇都積勝図』は、北京の南郊から正陽門と紫禁城を経て北郊までを描いた六メートルの長い絵巻であり、紫禁城は雲の中に隠されており、比較的詳しく描かれたところは正陽門、即ち前門あたりである⁽⁵⁾。万暦年間の『北京城宮殿之図』は宮殿を中心とする紫禁城およびの周辺の絵図であり、実際には絵よ

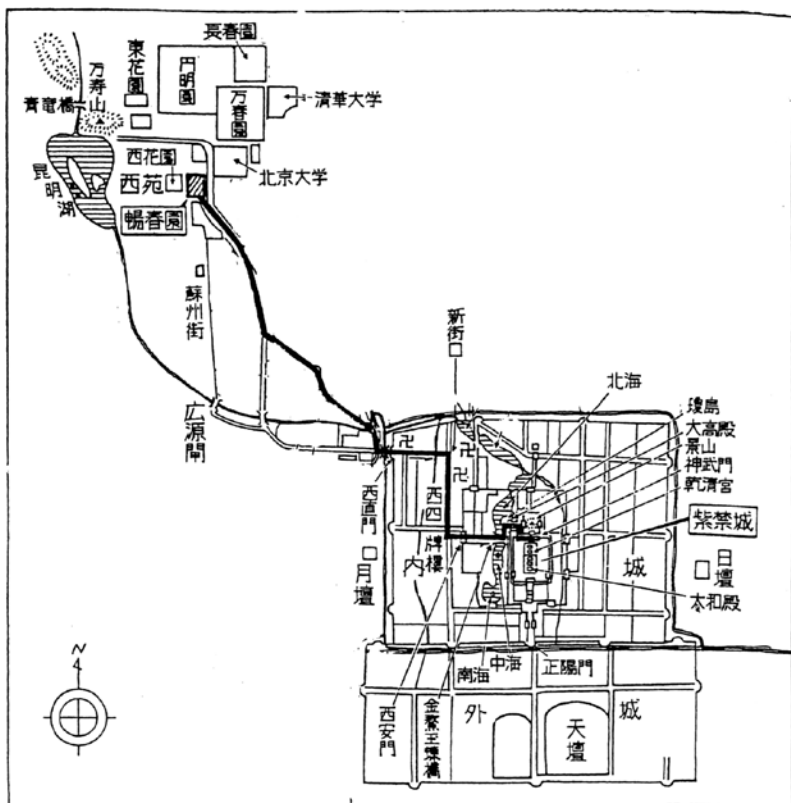
り地図の性格が強いと見られる⁽⁶⁾。北京の一部も描かれている康熙『南巡図』には、北京城の中軸線、即ち永定門から地安門までの区域に重点がおかれている。前門大街も入っていて、商店街の建築について一軒一軒の個性、具体的形態が克明に描かれているものの、皇帝の行列と迎える官僚を除いて、大通り正面（主に西側）の商店における民間人の活動はあまり見られず、それは皇帝の行列に対するやじ馬の禁止令の実施状況を忠実に反映したもののようである⁽⁷⁾。

徐揚の『京師生春意図』は、南から北京城の中心部を鳥瞰的に描き、紫禁城、天壇を含め前門地域の景観が比較的に鮮明で、中軸線を中心として、冬の景観が描かれ、具体的な情報は見えにくいものの、『乾隆京城全図』と対比すると、描かれた部分に相当のリアリティーがあり、北京関連の絵の中でカバーした地域が最も大きい絵である⁽⁸⁾。康熙帝の『万寿盛典図』と乾隆帝の『乾隆八旬万寿盛典図』は北京城に関するもっとも詳細な絵であり、描写された地域はほぼ重なっていて、皇帝の離宮である暢春園（政務処理のための重要な場所）から紫禁城までの幹線路沿いの風景と街道景観が描かれている。

二つの絵の画風、絵の技術等について簡単に比較ができないが、大体同じ沿路（約20キロ）に関しては、『乾隆八旬万寿盛典図』は、康熙帝『万寿盛典図』の二巻148頁の約倍になる二巻242頁の紙幅を用いて描いている⁽⁹⁾。『乾隆八旬万寿盛典図』と比べて、『万寿盛典図』は確かに圓明園から暢春園まで、玉簾橋・団城から西華門までの情報はないが、北京の西北郊外→現西直門内大街→新街口南大街→西四北・南大街→西安門大街→文津街→景山前街までの人々の活動、街の状況、商店、建物の名前を含め、様々な情報が記録されている（地図1）。

18世紀の北京城の景観について、前述した絵巻には、外城の南部、内城の西部地域の全部ではないが、一部はわりに詳しく記録されている。

なお、16世紀以降、異国認識として、西洋の訪問者、オランダやイギリスの使節団、宣教師等は、北京イメージを絵で表現していた。その内容は崇禎帝の自殺、キリスト教の礼拝堂（南堂等）、紫禁城、皇室の庭園、天文台の内外、



地図1：康熙帝六十歳誕生日祝典の路線図（小野勝年「康熙万寿盛典図について」による作成）

繁華街、庶民の日常生活、郊外からみた北京などの多くの場所・パノラマ景観が描かれている。絵に入れたもの・人等は確かに西洋風を帯びているが、大枠は北京の景観を反映している。早期のものは、主に清初のオランダ使節団の画家 Niewhoff Johan, 1793年にイギリス使節団の Alexander William 等の北京描写は、外国人が見た中国のイメージのみならず、実際伝統都市北京の研究の中でも史料価値がある⁽¹⁰⁾。また内城の東南部地域については、19世紀中期以降、新しい写真技術の開発とともに一部の地域に関して、欧米と日本の伝教師、

ジャーナリスト、旅行者等は、写真を撮影し、多くの北京関連の景観資料を残した。最も早い時期の写真は、イギリス人 Felice Beato の撮った作品である。Felice Beato は、1860年に第二次アヘン戦争で中国に侵入したイギリス・フランス連合軍の従軍記者として北京に入り、10月に北京のいくつかのところを撮影した。その中に正陽門——天安門の間の内城地域の全貌、また城壁の上から撮った東より西への内城の一部住居区域の写真は、多くの北京情報を記録した⁽¹¹⁾。19世紀末より、日本人も新しい技術を利用し、北京関連の写真を多く撮り、様々な北京情報を記録した。特に小川一真、山本讃七郎等は19世紀末、20世紀初における北京に関する多くの直観的資料を残した⁽¹²⁾。現東洋文庫の貴重漢籍の主要収集者のモリソンも20世紀初頭において、多くの北京景観関連の写真撮っていた⁽¹³⁾。

また北京の景観が大きく変わっていなかった20世紀30年代の状況に基づく王大観氏の絵『残冬京華図』と『旧京環顧図』、『夏京回望図』、『旧京天橋一覽』などの作品がある。『残冬京華図』は、回想録的に東郊の通州より朝陽門を経て北京城内の東部及び東南部に至る景観を描いている。ほかの作品は異なる季節の北京内外城の景観を描いている⁽¹⁴⁾。そのほかに19世紀後半から20世紀前半にかけて北京に関する膨大な画像資料が世界各地の公私の図書館などに所蔵されている⁽¹⁵⁾。

乾隆15年（1750年）頃に約六百五十分の一の縮尺で製図された『乾隆京城全図』は、科学的測量と伝統絵画を兼ね備え、それぞれの建築の構造、形、道路の状況（幅の変化など）、重要な建築、胡同等の名称の情報を如実に反映しており、北京の景観を理解する際、相当具体的な資料を提供している。絵図の性格を持つこの地図の資料価値は非常に高いため、研究者によりよく利用されている⁽¹⁶⁾。

18世紀における北京の景観の再構成を通して当時の首都の全体像を立体的に描き出す作業は、歴史学研究の中で非常に魅力的な課題であるが、それは上述

したような絵図、写真等の資料を駆使しても至難の業であり、長期的な資料研究と方法論の模索が必要である。今回の一部の地域、或いはいくつかの断片を取り上げて、都市景観の個々の側面を構築する試みは、その基礎的作業と言える⁽¹⁷⁾。

2、『万寿盛典図』の成立とその史料的价值

『万寿盛典図』（以下『盛典図』と略称）は、康熙52年3月18日（1713年4月13日）に康熙帝の60歳の誕生日を祝賀する文献『万寿盛典初集』（120巻）の重要な部分として編集されたものである。『盛典図』は、『万寿盛典初集』の41巻と42巻で、縦約23センチ、幅約35センチの版画148頁からなり、当時の代表的な画家である宋駿業、王原祁、冷枚等が絵を描き、著名の彫刻家である朱圭の彫刻を経て、印刷されたものである。『盛典図』は、誕生日の紫禁城内の儀式は全く反映しておらず、その前日、暢春園から紫禁城の神武門までの皇帝の行列の沿路の街頭における景観、祝賀の施設と人々の歓迎ぶりを「記録」した連続絵巻であり、数万箇所建物、施設、植物、動物などが描かれていて、約二万人の人物が描きこまれている。

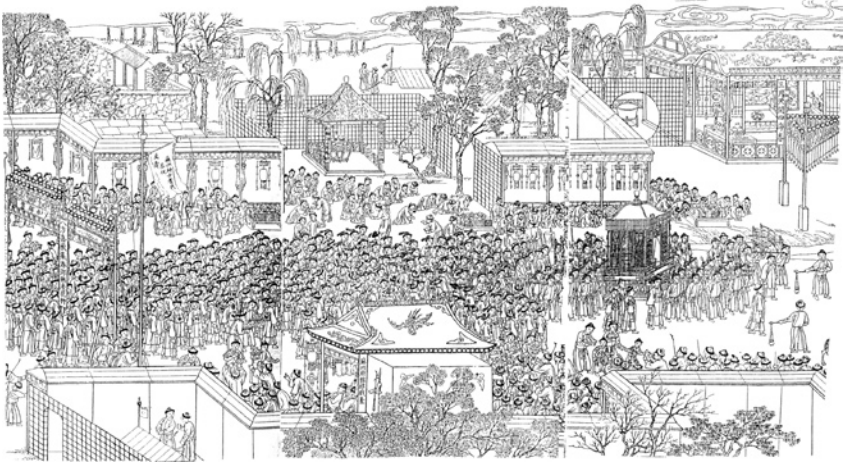
『盛典図』は、現在主に三つのテキストが存在している。

(1) 康熙55年に出版された『盛典図』（絵1）。

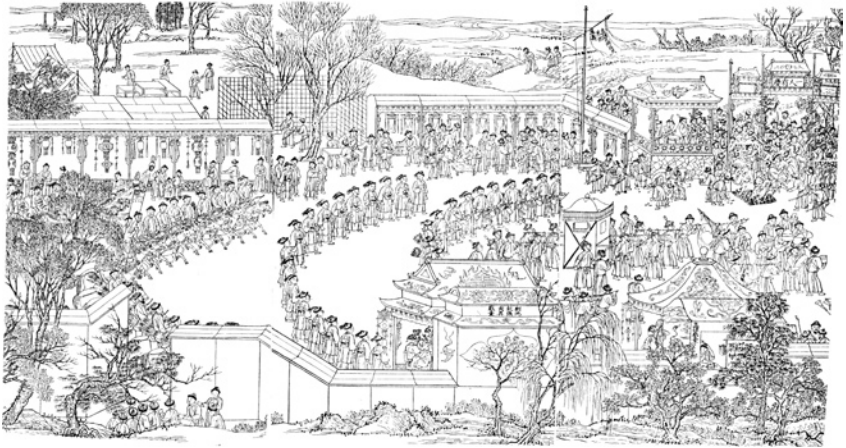
(2) 絹に描いた彩色の絵巻であり、上、下の二巻からなる。このテキストは宮廷画家が最初描いたものであり、出版された版画のもとになるものであったが、後、失われてしまったため、現在北京故宫博物院に所蔵されている絵巻（上巻が縦45センチ、幅39.4メートル、下巻が縦45センチ、幅63.47メートルある）は、乾隆年間、『盛典図』や当時の下書きなどに基づいて複製されたものである。

(3) は、乾隆45年頃、宮廷内の資料、特に出版した『盛典図』を参照しながら模写したもので、四庫全書の『万寿盛典初集』に収録されている。四庫全書は全七部あり、その模写も七つあったと考えられる。

18世紀における北京の都市景観と住民の生活世界



絵1-1：皇帝の行列（『万寿盛典図』乾隆年間）

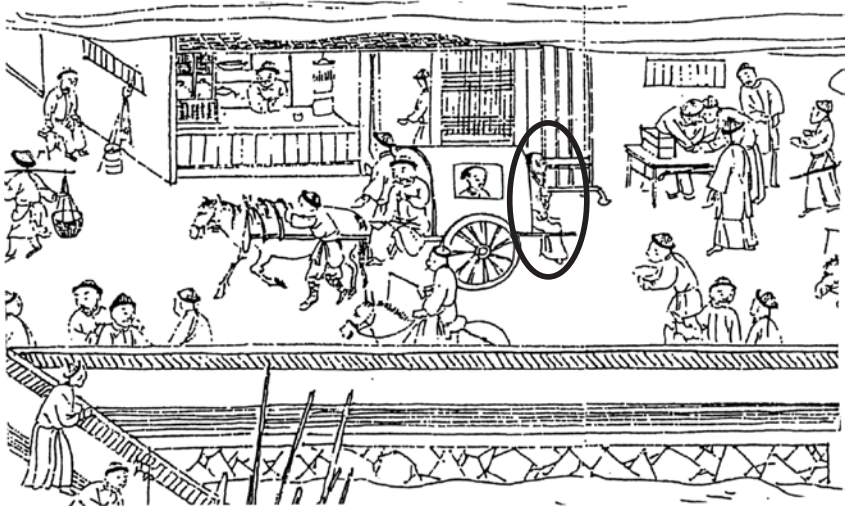


絵1-2：皇帝の行列（『万寿盛典図』乾隆年間）

こうした三つのテキストは、ほぼ同じであるが、例えば、絵2-1と2-2のように、乾隆年間複製の『万寿盛典図』の細部に馬車に乗る後部の女性の頭部の一部と角度は、微妙な差がある。実は、三つのテキストの細かいところに

は違いが存在している（絵2）。

『盛典図』の史料価値を考察する際には、その成立の経緯をあわせて考える



絵2-1：車を利用する女性と御者、付き人（文淵閣所蔵の四庫全書（影印本））



絵2-2：車を利用する女性と御者、付き人（『万寿盛典図』の細部、康熙55年）

必要がある。『万寿盛典初集』が編纂された発端は『盛典図』の作成であった。『盛典図』の考案と企画は、まず兵部右侍郎宋駿業（?—康熙52年：?—1713年）が行った。康熙帝の60歳の誕生日を祝う行事は康熙52年前から着々と中央と地方の官庁によって準備された。絵巻で祝典を記録するという「民意」は、康熙52年3月19日に宋駿業の上奏を通して、皇帝に許可され、宋駿業等によって推進された⁽¹⁸⁾。同年の5月3日に戸部左侍郎王原祁が祝典記録の仕事を引継ぎ、年末には絵巻の原稿が皇帝の審査を経て完成した⁽¹⁹⁾。宋駿業と王原祁は、有名な文人官僚であり、当時代表的な画家として絵を描くことを通し、皇帝と朝廷の関連行事の記録に多く関わっていた。

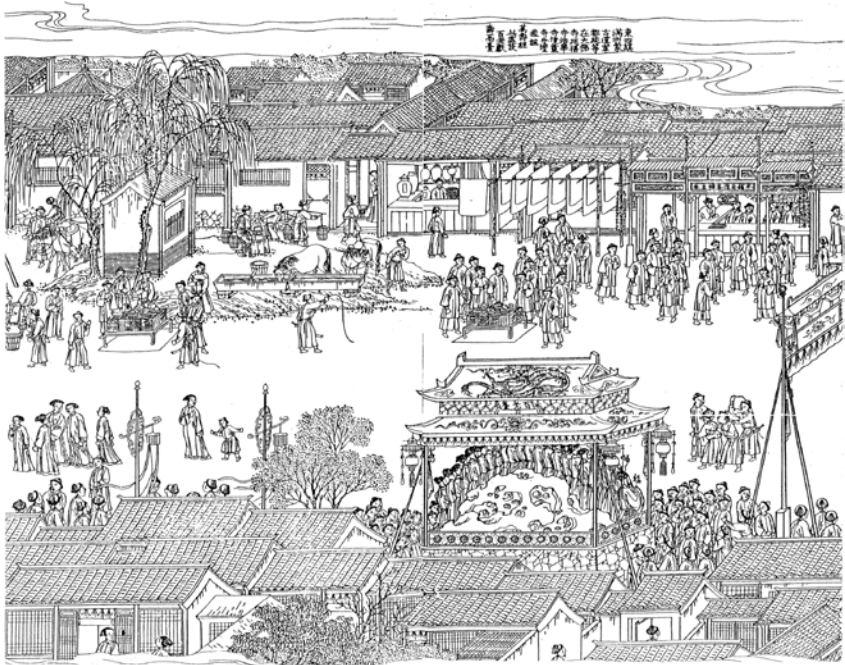
宋駿業は、康熙帝の南方視察に関する大規模の絵巻を作成する責任者であり、自らも幅の約15メートルの『康熙南巡図巻』という作品を描き⁽²⁰⁾、絵巻で重要な行事を記録する画家や関係スタッフの調達、行列の通過地域の写生、および様々な事前準備に関して経験があった。宋駿業の後を継いだ王原祁は、「宋駿業の下絵には不備がある。特に西直門から紫禁城までの内城沿路、即ち祝典の重要部分の描き方が、まだきちんとできていない」と指摘しているが、『盛典図』を完成させる基本的な方針・構想は宋駿業によってたてられ、万寿盛典を経過した約一か月後には、多くの下絵がすでにできていて、それは宋駿業の準備に負うところが多かった⁽²¹⁾。

『盛典図』は、繁栄と平和の時代を築いた皇帝の偉大な功績、そしてその比較にならないほど素晴らしい人格を賛美する目的で制作されたものであったが、『盛典図』の発案者・責任者は、絵巻を作成する際に、この式典に関して絵図を歴史記録と同じように扱い、絵という表現手段で康熙52年3月17日、即ち皇帝の誕生日前日、皇帝が暢春園より紫禁城に向かう沿路の臣民の歓迎のありさまを忠実に記録しようとした⁽²²⁾。

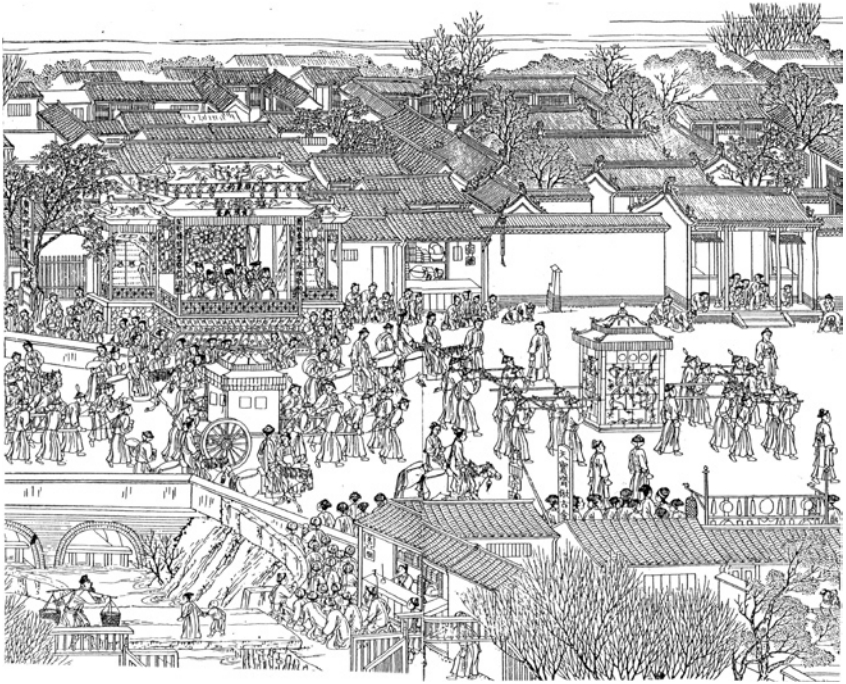
しかし長距離移動の行列は20キロ以上の道程があり、街道におけるそれぞれの場所を通過する時間は一瞬であり、行列の足を留める際も非常に短い時間で

あった。瞬間の出来事を記録できる写真や動画撮影などの現代技術がなかった時代、それぞれの場面を記録する最善の選択は、画家が各々ふり当てられた地区に対して、周辺の環境を細かいところまで写生して、入念に事前準備を行なうことにしかなかった。

絵巻を作成する責任者によれば、『盛典図』には皇帝を迎える重要な施設が50余箇所あった。『盛典図』の中で康熙帝の行列を迎える事前準備、および行列が通過する場面は、16ページ（下巻の42-57頁）で約11%を占める。先頭を進んだ皇太后等の行列が9ページ（上巻54-62）で『盛典図』全体の6%を占めている。それは西直門内大街の東三官廟→崇元觀→北広濟寺の地域である（絵3）。



絵3-1：西直門内大街（『万寿盛典図』康熙55年）



絵3-2：皇太后の行列（『万寿盛典図』康熙55年）

『盛典図』全体を見れば、画家たちは、二つの主要な場面でもって、郊外の「民和年豊坊」から「百祥庵」までの康熙帝の行列，及び西直門内の「東三官廟」→「崇元観」→「北広濟寺」の皇太后の行列が，暢春園から紫禁城まで通過する同時帯の沿路景観を忠実に表現しようとした。つまり、『盛典図』は時間の経過につれて順次に現われる連続ドラマではなく，同時帯の全景観であり，皇帝の行列通過はその全景観の一齣にすぎなかった。同時帯の20キロの全景観を描き出すことは無理であるが，各ポイントに画家，或いは関連のアシスタントを多く配置することでそれを解決したと思われる。具体的な情報が欠如しているため，不明な点が多いが，一般的に多くの画家やスタッフは各自の下絵の担当地域について，様々な祝典工事等と同じように祝典の前に周到な準備を

行なつたと推測できる。

画家は人物・動物などの活動・動態の場面を極力表現したがつたと考えられるが、絵巻は結果として瞬間を記録した静止画であった。絵に留められた場面、特にその変動的な内容はただ一瞬、或いは非常に短時間の現象である。このような短期間の動態的な場面は個性や特殊性をもつが、長い目でひろく考えると、当時の日常的なものであつたとも考えられる。しかし、絵の中で長期間に不変・不動のものも多くあつた。即ちあまり変化しない自然景観（ただ、植物などは季節によって顕著な変化がある）、建物、施設、道具、さらに具体的な経済生活にかかわる商店などの人工建造物などである。これらの物的景観と人々の活動を、画家がありのまま描写したのか、或いはどういう基準でどういうものを取り入れ、またどういうものを捨象したのか、という主観的な選択、視点、手法、テクニクの問題については不明な点が多い。

『盛典図』には、単なる中国の山水画、人物画などの伝統的技法だけではなく、新しい絵の技法、即ち西洋画の技法も導入されている。明末、西洋の宣教師たちがもたらした西洋画の方法は、宮廷に浸透し、画家たちに大きな影響を与えていた⁽²³⁾。実際宋駿業の原稿に対する王原祁の不满は、主に構図の不安定さと絵における建物・人物等の比例の問題であつた⁽²⁴⁾。王原祁は、縮尺の方法を利用できる「界画」と人物画の「達者」を取り入れて、西洋画で重要視された透視・比例の方法を導入し、記念用の施設の額、対句などの字体を含めて、細かい景観を観察し、絵の対象と内容に細心の注意を払って模写し処理した⁽²⁵⁾。絵の内容全体について、朝廷の文官の意見だけではなく、当事者である康熙帝の審査もあつた。したがって『盛典図』は、康熙52年3月17日の祝福と歓迎式に関する多くの情報を記録し、ほかの関連文字資料と同じように当時、最も直観的なドキュメンタリーであつたと考えられる。

『盛典図』の内容に関しては、『万寿盛典初集』に二巻からなる説明がある。43巻と44巻には暢春園から紫禁城まで経路順に従って沿路の地名、主要な建築、

宗教施設、橋梁、河川、祝福施設の名および出品者（出資者）が克明に記載されている。この記述を見ると、施設の前における人々の概数、演劇舞台を設置する材料、横断幕の長さ、具体的な地名間の距離まで詳細に調査されていたことが窺える⁽²⁶⁾。当時祝賀施設が実在していたが、何らかの理由で43巻では二箇所、44巻では七箇所が『盛典図』に取り入れられず、皇室メンバーの祝賀施設を絵に描かないケースもあった。これに関して「図記」には説明がある⁽²⁷⁾。当時、皇帝の生誕を祝福する施設は、北京の内外城の城門周辺、特に内城の正陽門→天安門、外城の珠市口等、郊外の西頂広仁宮などの地域に「莫不樹坊立木、張樂然灯、宝榭層樓成於俄頃、宮牆綺陌、忽改常觀」と言われるように多く建設されていた。民間の自発的な祝賀施設は、巷のいたるところにあり、その数は数え切れず、一ヶ月以上も飾られていた。これらの情報は『盛典図』には反映できてはいない⁽²⁸⁾。

『盛典図』に描かれたものの真実性に関して、以下、いくつかの絵の事例を見ながら検討してみたい。

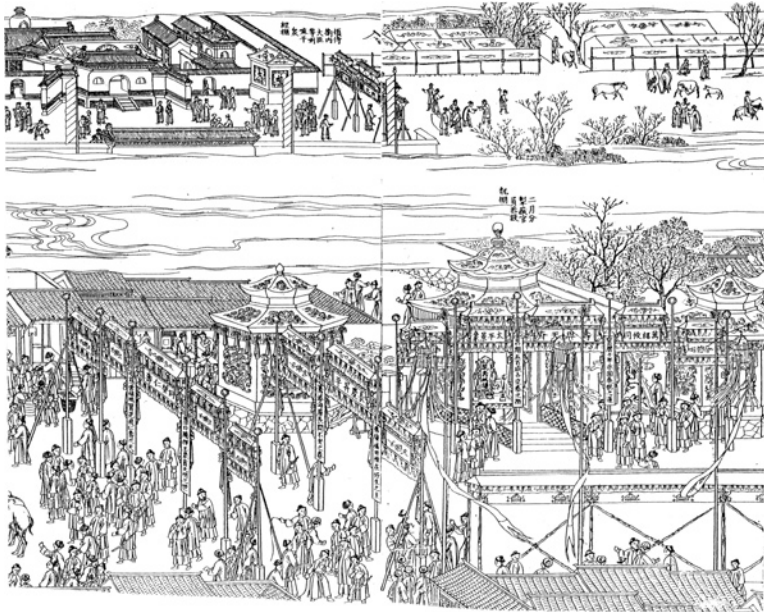
まず、彩色の絵巻の色から、描かれた景観の真実性を窺うことができる。絵巻にある沿路の柳、樹木と草などの新芽の色と状況、特に鮮やかな桃花などは、北京の寒い初春の自然風貌をよく反映させている⁽²⁹⁾（絵4）。

次に西西北大街の施設を検証したい。『盛典図』の上巻の34頁の大通りの真ん中に近いところに北京の市街の中でも珍しい「観音庵」がある（絵5、地図2）。乾隆15年の『京城全図』にもこの施設とその周辺の建物が正確に書かれている。北京の胡同に関する清末の調査もこの施設の位置と周辺施設の関連性を裏付けている⁽³⁰⁾。

第三に旧北京図書館という場所の変化を見てみたい。北海に隣接した場所は、焼失した明代の玉熙宮の敷地であったが、康熙年間に、宮廷用の馬小屋となり、乾隆年間に、新しい建物（陽澤門）が立てられ、清末に京師図書館が建てられ、その後、北京図書館となった。この地区には康熙から乾隆年間にかけて変化が

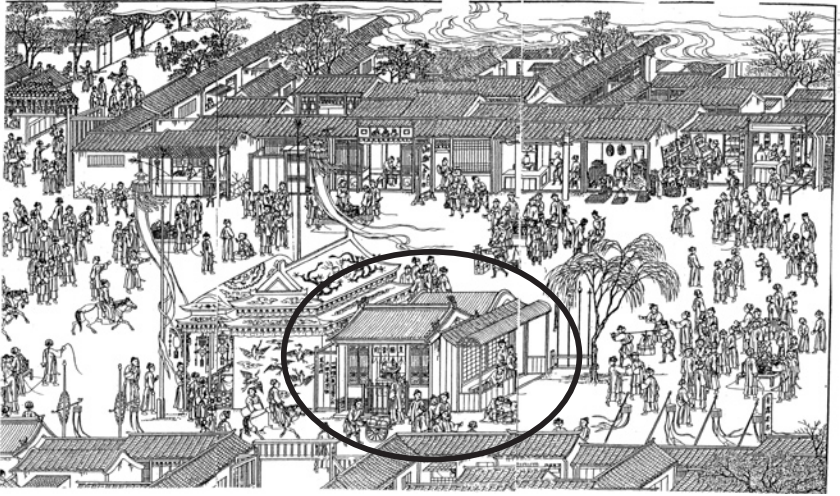


絵4-1：北海付近（『万寿盛典図』康熙55年）

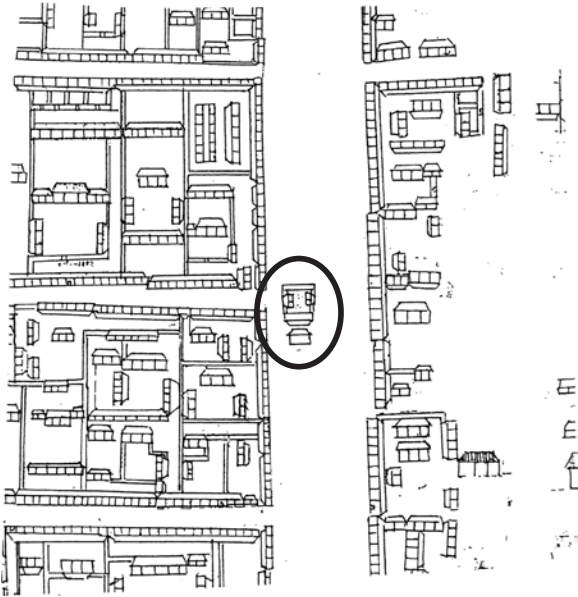


絵4-2：北海付近（『万寿盛典図』康熙55年）

18世紀における北京の都市景観と住民の生活世界



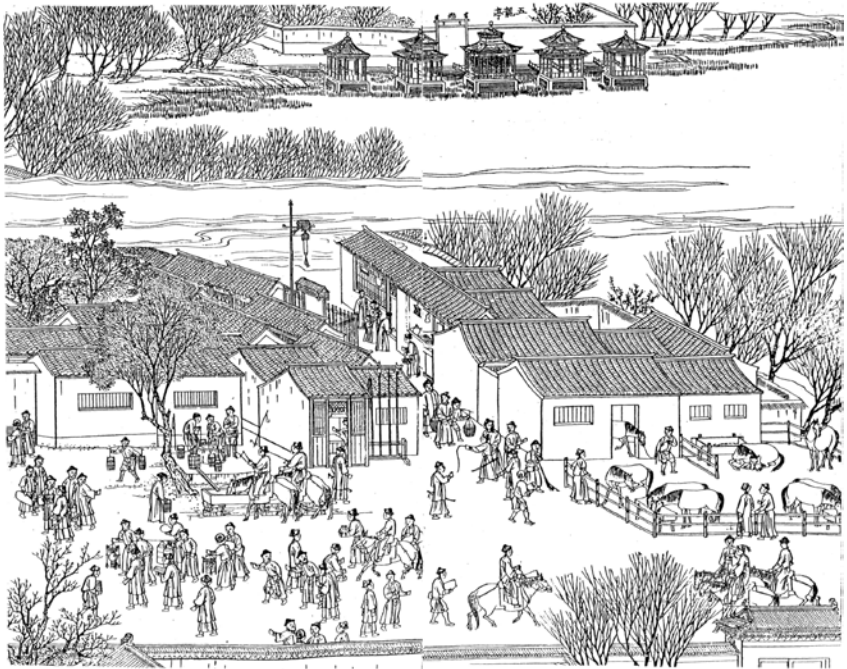
絵5：「観音庵」（『万寿盛典図』康熙55年）



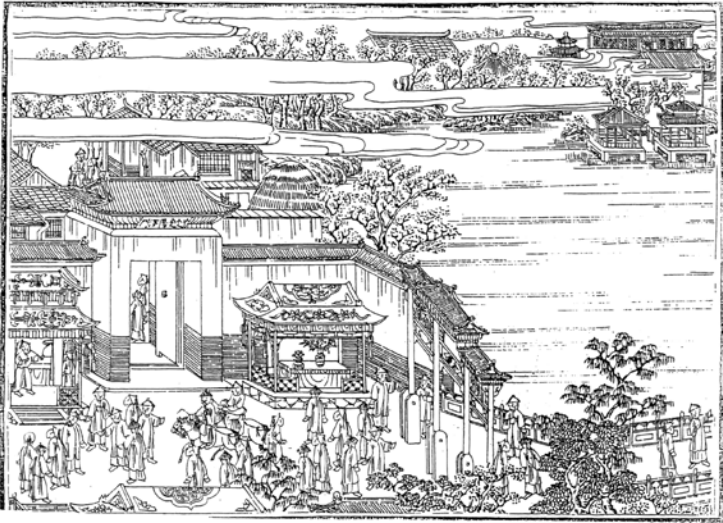
地図2：地図上の「観音庵」（『乾隆京城全図』乾隆15年，1750年）

あったものの、その後、清末まで大きく変らなかった⁽³¹⁾(絵6, 写真1)。

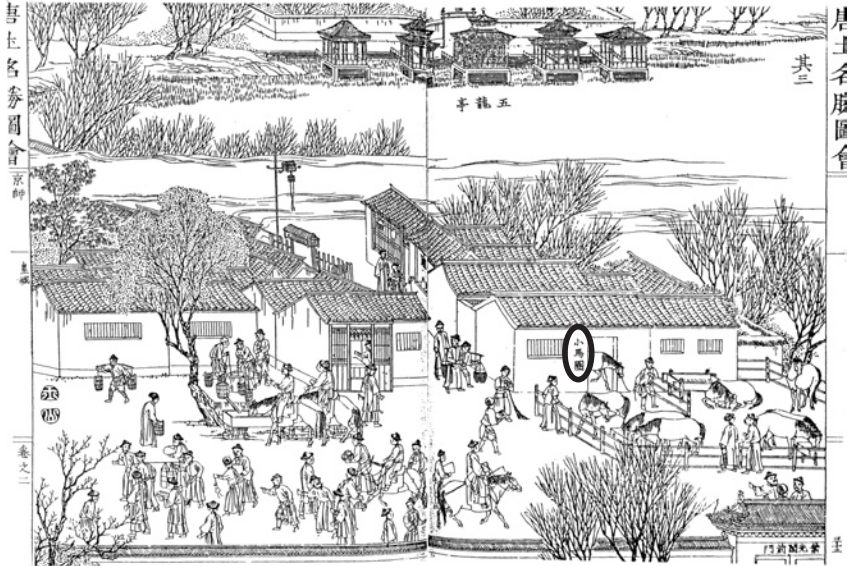
以上、『盛典図』の成立の経緯, 事前の準備, 事後の審査, 画家達の絵画の技術および『盛典図』に関する文字説明などの側面から『盛典図』を見てきた。その特徴や資料としての価値について、描かれた部分はリアルな性格を持ち、当時の北京の一部の地域の多くの情報を記入していること、文字史料よりも立体的な北京像を構築する際に貴重な史料であることが分かる。



絵6-1:「小馬圈」(『万寿盛典図』康熙55年)



絵 6 - 2 : 「陽澤門」(『乾隆八旬万寿盛典図』, 1792年)



絵 6 - 3 : 「小馬圈」(岡田尚友『唐土名勝図会』, 19世紀初)



写真1-1：中国国家図書館旧館（筆者2008年撮影）



写真1-2：中国国家図書館旧館前と北海（筆者2008年撮影）

三、『万寿盛典図』の日常性と非日常性

『盛典図』では基本的に鳥瞰図的に上から下を見るという形で北京の市街と人々、動物の行動が描かれている。すでに述べたように絵の核心は、皇帝の行列とその経路である。画家たちは遠近法で沿路の景観を描き出していて、その視線と角度は、皇帝の行列の進行と逆であり、天下の臣民が行列を迎える側にあった。『盛典図』の順序は、紫禁城の神武門から西へ向かい、さらに西安門大街と西西南大街の丁字街より北へ向かい、そして新街口南大街から西へ西直門を経て、北西の暢春園方向へ向かうという順番であったが、雲の中に隠されるか、街路のぎりぎりのところまでしか描かないという手法で沿路の多くの景観は省略された。描写された重点は大通りとその北側、もしくは東側であった⁽³²⁾。

以下、こうした姿勢と視点から描いた『盛典図』の内容を、日常性と非日常性という観点から検証してみたい。

一般的に誰かの誕生日と関連した祝いは大体一日で済むと思われるが、皇帝の誕生日（万寿節）は、元旦、冬至等と同じような国の祝日ではあるものの、一年という時間のサイクルに従った日常的ものではなかった。康熙52年は、皇帝の即位52年、60歳還暦という重要な年であったため、北京で祝賀式典を行なう際には行政、満洲族、また各地域の有力者、商人を含め、朝廷の上下が挙国体制で臨んでいた。平和的な秩序を築き、長期的な繁栄を導いたとされる皇帝の60歳の誕生日を祝賀する行事の規模は、中国史上も空前のものであった。関連祝賀活動は、北京およびその周辺においてすでに述べたように数十日間行われた。北京市内の祝福施設は、何時撤去されたのかは不明であるが、康熙52年12月26日の王原祁の上奏文に「至図中各処匾額，対聯各体字樣，擬派曹日瑛照式恭写」とあることから、主要な施設は遅くとも52年の年末までは北京の市街

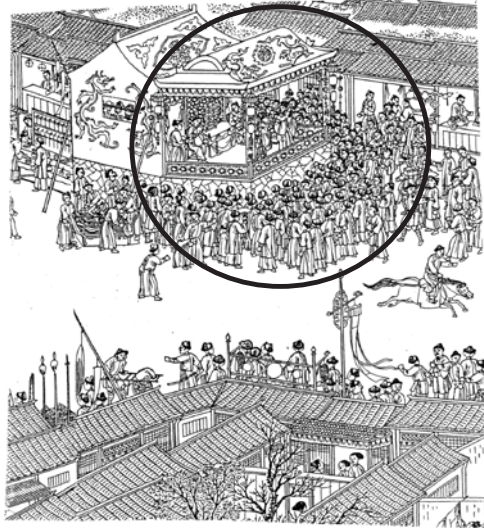
に存在していたことが分かる。それにもかかわらず、康熙帝の60歳の生誕祝典は、一つの特異な出来事、或いは歴史上の特異な事件であるに違いない。北京の住民にとって、一年、ないしもっと長い期間内、皇帝の60歳の生誕の祝福施設が日常的なものとして存在していったとしても（その中のいくつかは後世に残っている）、歴史上の日常的なものとして扱うことはできない。

つまり、『盛典図』の中の何が日常的なものであるか、何が非日常的なものであるか、その分別は実際難しいが、区分の基準として、祝福式典に関わるものは、一般的に日常性はないと考えられる。しかし、白黒の版画を見ただけでは識別しにくいところもある。それは乾隆年間、大体宮廷に所蔵している『盛典図』に関する彩色の視覚的資料および『盛典図』に基づいて模写した彩色の『康熙六旬万寿慶典図巻』⁽³³⁾、及び『万寿盛典初集』の図記を見ると、色と施設の状況によって分別できる。

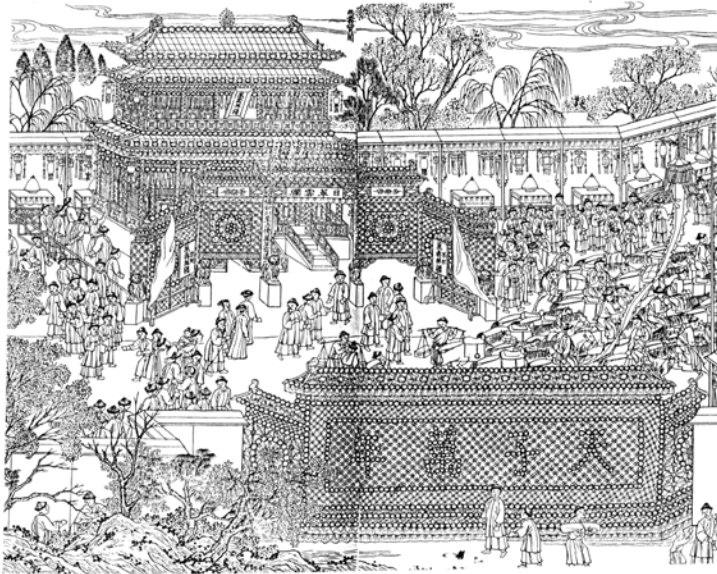
即ち、沿路の随所にあった「彩坊」、皇帝を迎える特殊な建築、様々な「接駕皇棚」（皇帝を迎える施設）、「龍亭」、演劇の舞台、長廊、匾額、「頌経」（仏経）棚（小屋）、揭示版、特別警備用の小屋等々がこの類である。「万寿節」を祝賀するという特殊な目的のため作られた一時的な建造物、或いは仮設の施設であり、各々の施設はその役割を果たした後、撤去可能のものである（絵7）。

また皇帝の誕生日を祝福し、皇帝の行列を迎えるために沿路に集まった各地域から上京した官僚、紳士、老人⁽³⁴⁾、商人と庶民、外国の使節、また皇帝の行列を護衛し、秩序を守る八旗の精鋭部隊、および祝典のために大通りに出現した象の行列、騎兵、宮廷楽隊、各地域の俳優は、北京の日常的な存在ではなかった。これらのものを除いたもの、つまり、胡同、四合院、商店、労働者、旅人、住民、街に現れる様々な道具、車、動物などが、北京の日常生活に関わるものであったと考えられる。

しかし、『盛典図』は康熙帝の60歳の生誕の盛大な祝典という特殊な事情を対象として描かれたものであり、皇帝が特殊な乗り物に乗り、臣民（沿路で祝



絵7-1：演劇舞台（『万寿盛典図』康熙55年）

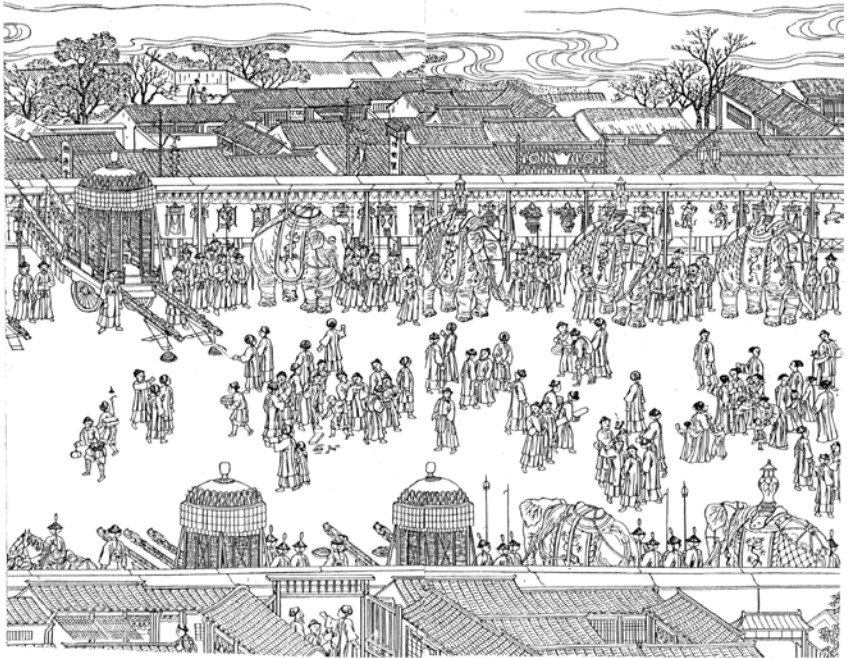


絵7-2：仮設置の壁等（『万寿盛典図』康熙55年）

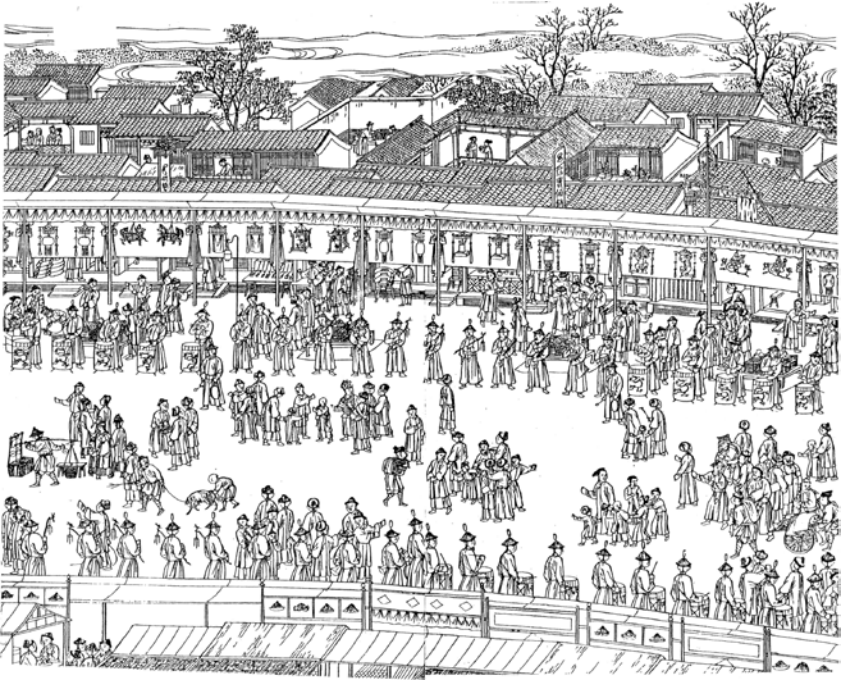
福する全員)に見られる形を取っているが、警備上の理由で、普段街にいるようなその他の多くの人々は絵に登場できなかったと推測できる(絵8)。

北京の日常性と非日常性に関して、北京を訪れたこともない岡田尚友が、『唐土名勝図会』を編集した際に、北京の日常性と非日常性を意識したかどうかは不明であるが、結果としては、18世紀およびそれ以前の北京関連の情報を十分に吟味した上で、北京の日常性と非日常性を区分する作業を行っていたと考えられる。

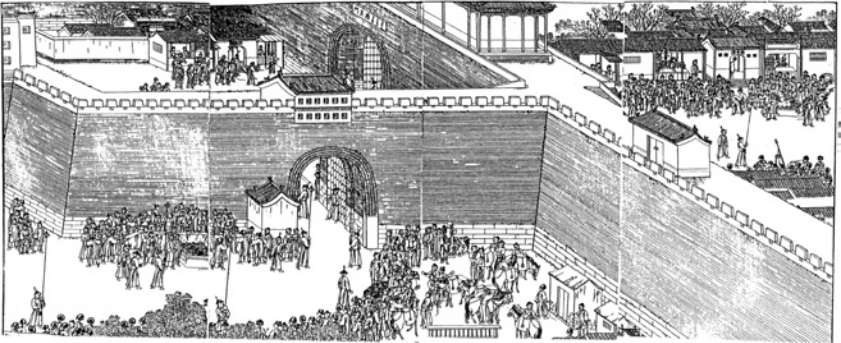
一部の絵は、参考にした『盛典図』の非日常性の部分を取り出して再構成していた⁽³⁵⁾(絵9)。絵9-1, 3, 4は、岡田尚友に参考されたと考えられる。



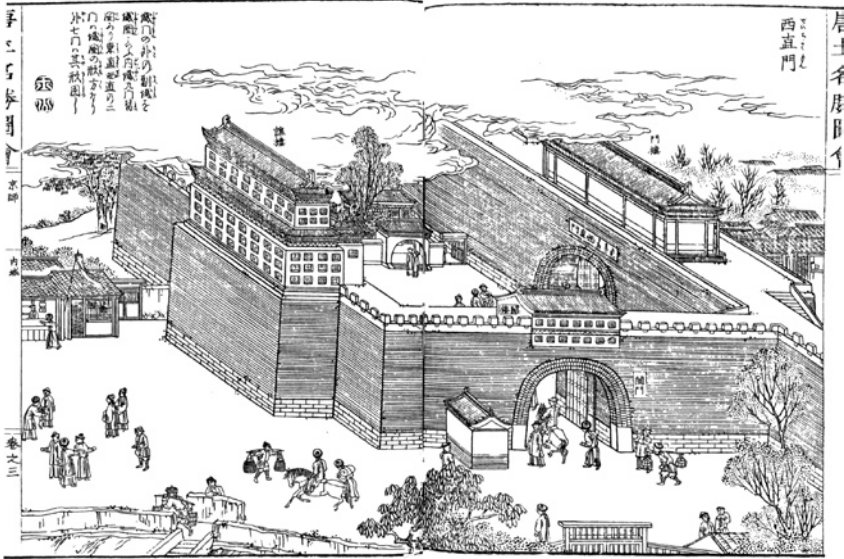
絵8-1：西安門に近い内城の大通(『万寿盛典図』康熙55年)



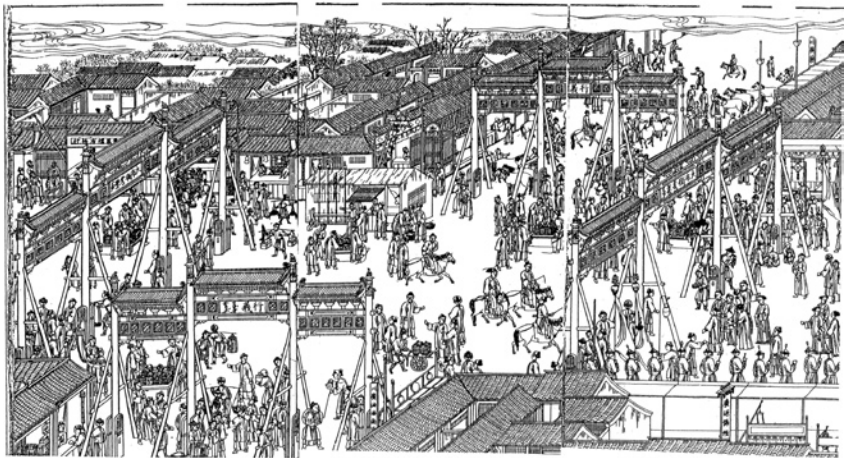
絵8-2：西安門に近い内城の大通（『万寿盛典図』康熙55年）



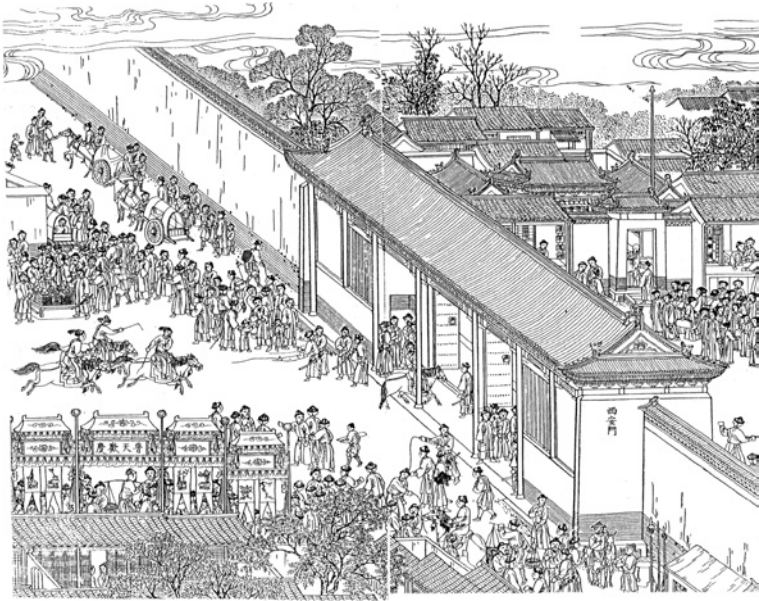
絵9-1：西直門（『万寿盛典図』康熙55年）



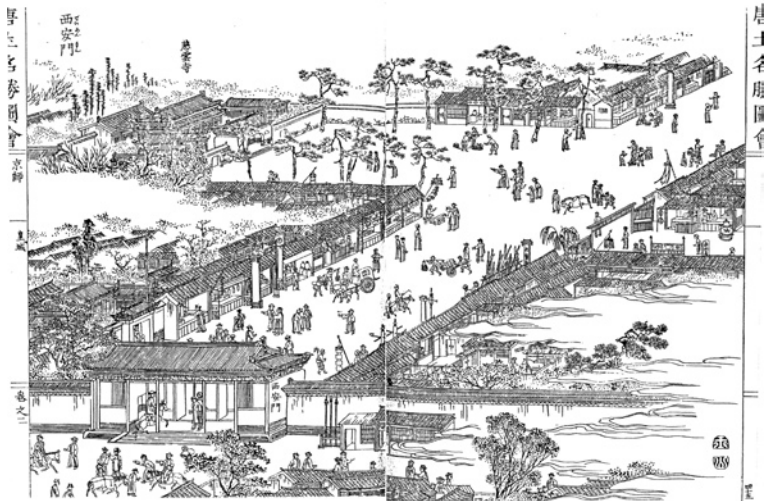
絵9-2：西直門（岡田尚友『唐土名勝図会』，19世紀初）



絵9-3：西四牌樓（『万寿盛典図』康熙55年）



絵9-4：西安門（『万寿盛典図』康熙55年）



絵9-5：西安門（岡田尚友『唐土名勝図会』，19世紀初）

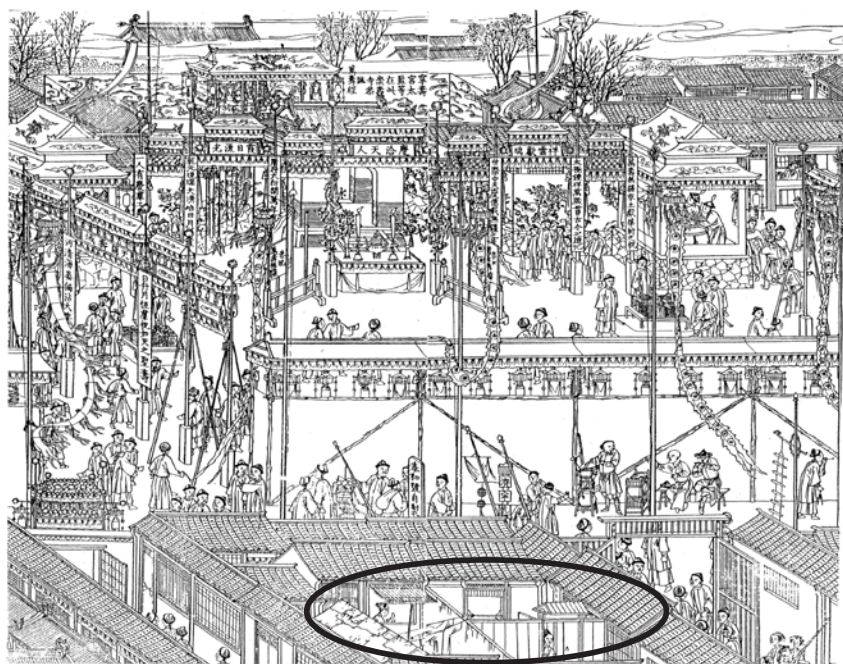
岡田尚友の『唐土名勝図会』には、もちろん想像的な北京のイメージがあったが、19世紀初頭において、関連資料によって局地の北京印象を描き出そうとした試みは非常に興味深く、史料として扱えるかどうかは判断しにくい、優れた絵であり、一外国人が憧れる北京の景観を表現したものであると理解できる⁽³⁶⁾。

四、描かれた北京市街の景観と住民の日常生活

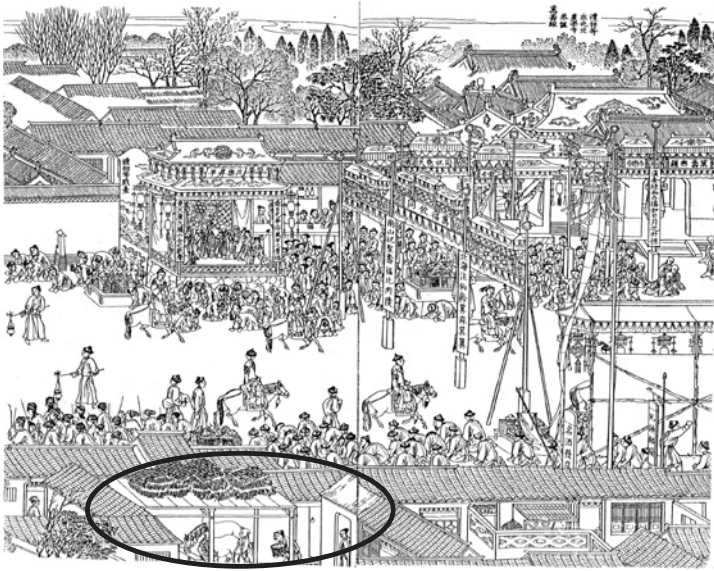
『盛典図』の中に描かれた北京の郊外と市街、人々の活動は、前述したように基本的に当時の事実に基づいて描かれていて、スタッフの臨場写生、及び事前、事後の現場調査・チェック、裏づけ作業、皇帝及び大臣等の審査を経て完成したものである。省略されたところを除いて、祝福施設と祝賀しにきた人々の活動と姿はリアルな性格を持ち、事実として見てもよいと思われる。すでに指摘したように、康熙帝の60歳生誕の祝賀に関するものは、18世紀における北京の都市景観を考察する際に、非日常的な性格を持つものとして扱わなければならないが、康熙帝の60歳の「万寿盛典」は、挙国体制で実施した空前の国家式典として、康熙帝個人だけではなく、満洲族および清朝の歴史、特に政治史、国際関係史、国家財政史、経済史を研究する際に、非常に重要な大事件、出来事であり、その孫の乾隆帝の80歳の祝典、清末の西太后の60歳の祝典と比較する価値も大きい⁽³⁷⁾。こうした非日常性の部分に関する考察は今後の課題にしたい。

康熙帝の60歳の生誕を祝賀する施設は、少数の個人、また絵5（絵14-2）左側の文字が示すように、地元の商人等を除いて、朝廷の各部門、地方政府および皇室、満洲族等の軍隊の各組織が担当した地域に建設し、責任を持っていた。それによって約20キロの長い道程と市街に五十余箇所の重要な施設が建設されていた。約半分強の街道に祝賀の施設と飾りがあり、そのため大通りに面する建物の表部分は覆われて関連情報が識別しにくくなっている。しかし祝賀

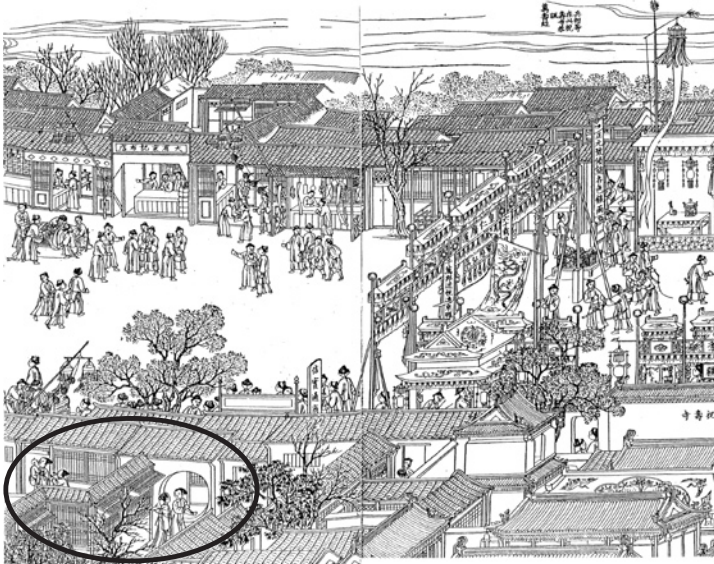
施設や街頭装飾に隠されていないものも約半分ある。特に西直門内大街の広慈寺から新街口まで、新街口南大街から西安門までの間は祝賀施設が比較的少なく、一部の地域には殆どないところもある。それは北京の市街の本当の姿であったと考えられる。『万寿盛典初集』の図記によれば、施設は西北郊外に30余箇所、城内の経路に19箇所あった。つまり西北の郊外は大いに装飾されていた。また画家の視角の問題、描かれた街頭の南側、西側の表部分に関する情報はわずかであるが、その裏部分、特に建物の構造、人々の活動、中庭の状況は多少読み取れる（絵10）。



絵10-1：住宅の中庭（『万寿盛典図』康熙55年）



繪10-2：住宅の中庭（『万寿盛典図』康熙55年）



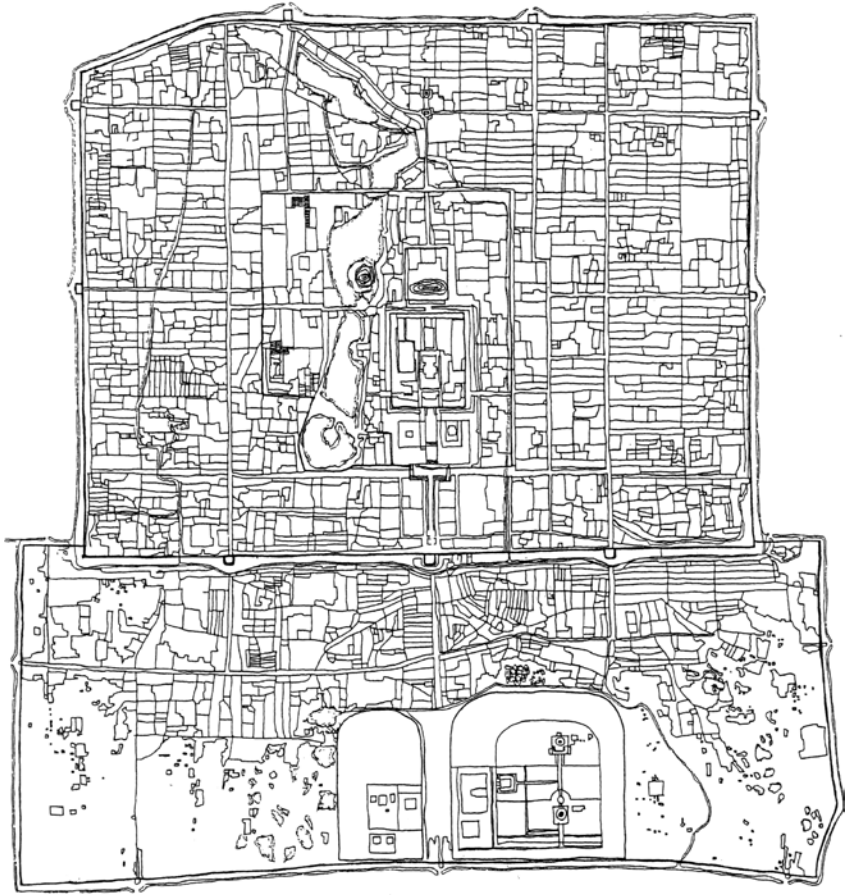
繪10-3：住宅の中庭（『万寿盛典図』康熙55年）

動かない景観

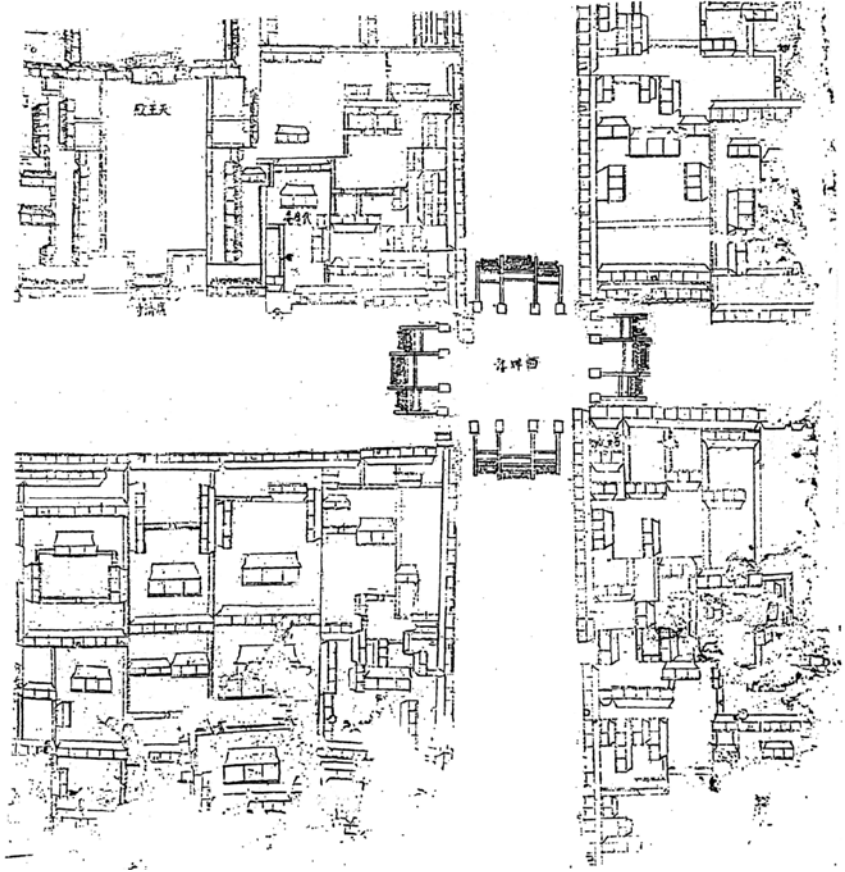
『盛典図』を見ると、西直門の城壁と紫禁城周辺の宮殿等の施設が大きく高く描かれている。それは、実際建築物の高さ、規模の状況を反映し、視覚から北京の中核と関門という象徴的な存在を忠実に表現している。大きな城壁に囲まれている内外城の中で、いくつかの東西方向、南北方向の主要な街道を中心に、完全な規則的ではない格子状の街道ネットワークが形成され、街道に分割された空間では、独自の政治、軍事、社会経済の地域が成立していた。主要街道の要所には、鼓楼、鐘楼、四牌楼（東と西）、皇城の西安門などの施設やシンボリックな建築が建てられている（地図3）。河川、湖の間、石橋が架けられ、街道や遊園地などを繋いでいた。

『盛典図』に描かれたものは、徐揚『京師生春意図』のような北京の中心部、即ち紫禁城を中心とする中軸線の南北方向の主要な建築ではないが、中軸に位置する紫禁城の一角、人工の山である景山が入っている。民家より何倍の高さを持つ景山は、城壁、宮殿を含めて、一目で余すところなく城内を見渡せる（写真2）。確かに『盛典図』に描かれたものは西直門から西直門内大街→新街口南大街→西四北・南大街→西安門大街→紫禁城の神武門まで、即ち中軸線の西側の一部分の市街風景に過ぎないが、特殊な場所、各々の細部を除いて、北京城内（特に内城）における街の全体的空間構造、景観は大体同じような形であると考えられる。

具体的に見れば、大通りを挟んで、街に面する住宅、商店などは、ほぼ平屋であり、胡同（主要な街道を繋ぐ横町）が大体表通りと直角という形で接続するサブ道路となっていて、建物が隙間も余り見られないほどびっしり並んでいる。建物は煉瓦、木材等を主要な材料として作られ、灰色の瓦が屋根を覆っていて、壁は石灰類の材料で白く塗られている。家屋、商店等は大通りに面しているが、それぞれ奥にある複数の建築と繋がっていて、さらに長い壁で接続し、



地図3-1：北京城と内部空間構造



地図3-2：地図上の西四牌楼（『乾隆京城全图』乾隆15年，1750年）



写真2-1：景山から北へ（筆者2008年撮影）



写真2-2：景山から南へ——紫禁城（筆者2008年撮影）



写真 2 - 3 : 住宅区 (筆者2008年撮影)

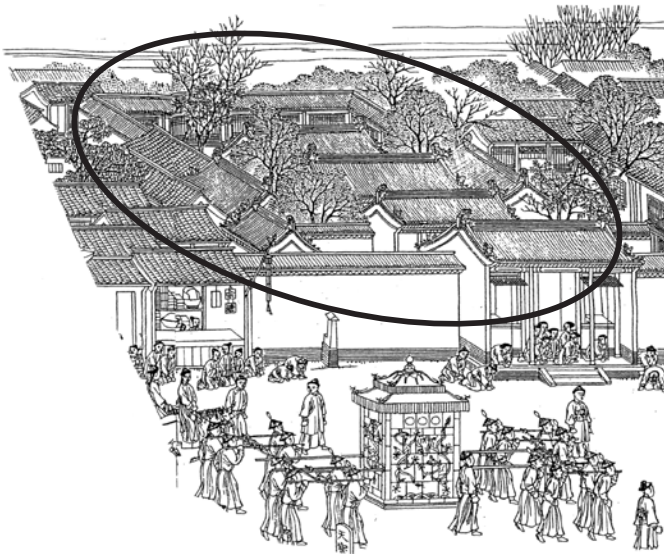


写真 2 - 4 : 住宅区 (筆者2008年撮影)

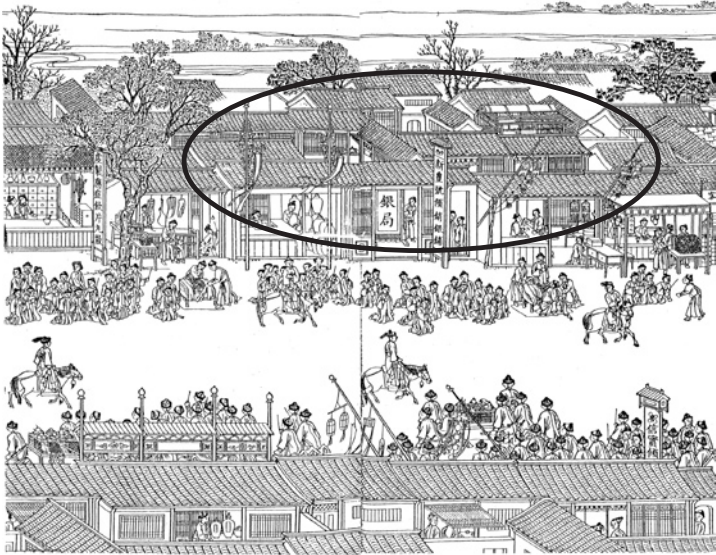
一つの閉鎖的な「四合院」となっている。建物の大きさは、それぞれ異なっており、一般人の住宅と満洲貴族の住宅は区別できるが、高さや形には大きな差はない。それぞれの「四合院」には中庭があり、高い樹木は、勿論、小さい盆栽すら見られるところもある。表通りにある胡同の出入口には安全防衛のために柵形の門が設置されている⁽³⁸⁾(絵11)。

市街の主要な街道は非常に広く、一般的に見れば、直線道路であったが、その幅は画一的なものではなく、地域と方位によって多少異なっていた⁽³⁹⁾。したがって両側の建物の繋がりには、一見整然たる柵のように見えるが、大通りに面する家屋と商店の並びは、実際、凸凹状であり、建物と道路の境界線ははっきりしていなかった(地図4、写真3)。

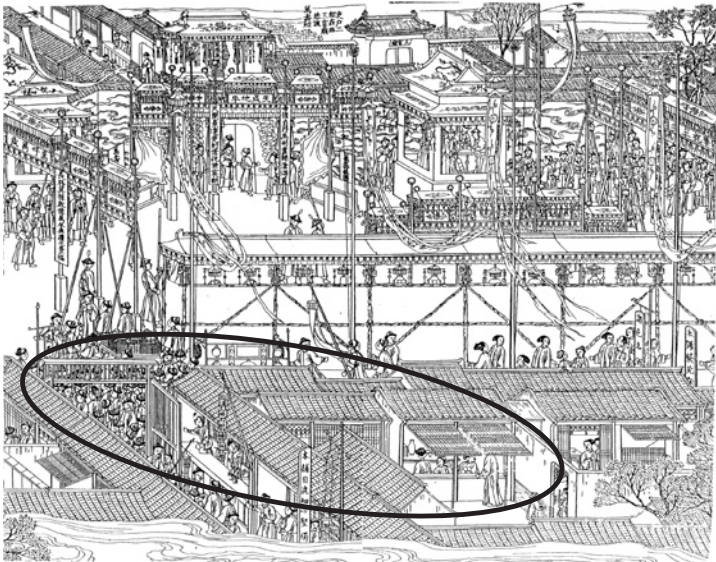
多くの佛教・道教系の宗教施設は大通りと胡同の居住区域・商店街に点在していて、建物の形と瓦、壁の色によって宗教施設と民家・商店とを判別できる



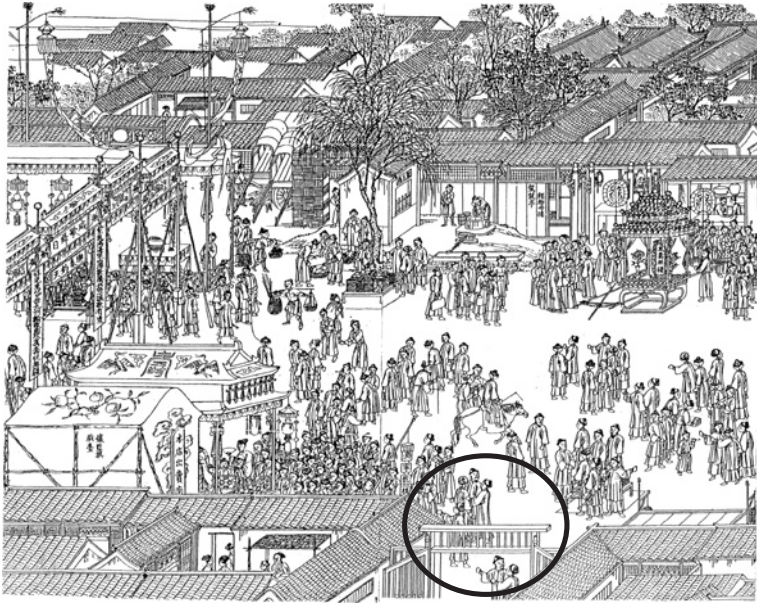
絵11-1：貴族の四合院（『万寿盛典図』康熙55年）



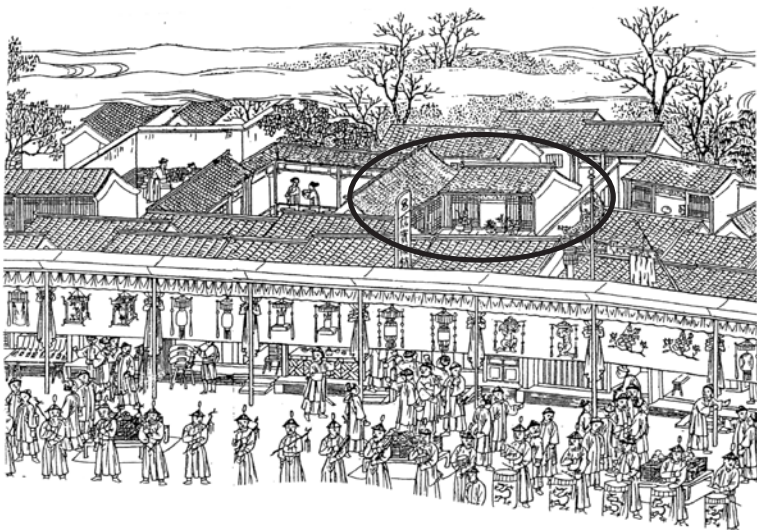
絵11- 2：普通の四合院（『万寿盛典図』康熙55年）



絵11- 3：胡同の柵欄と裏の店（『万寿盛典図』康熙55年）

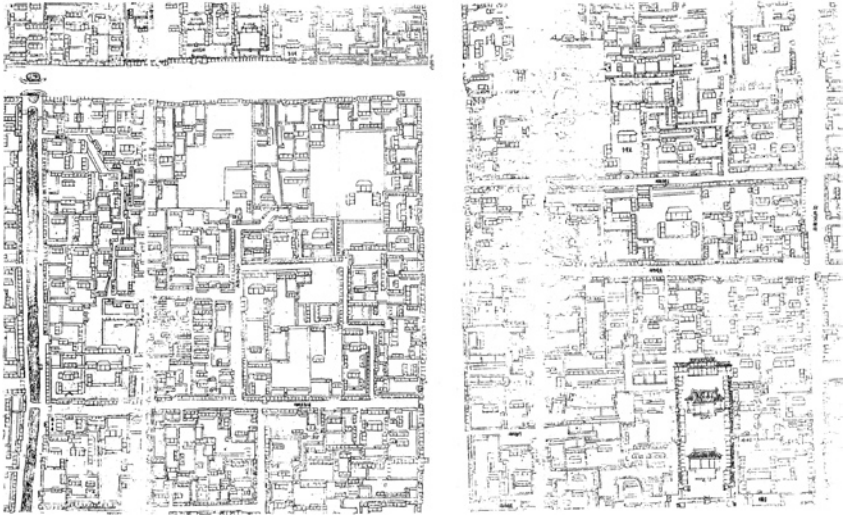


絵11-4：胡同の柵欄（『万寿盛典図』康熙55年）



絵11-5：庭の盆栽（『万寿盛典図』乾隆年間）

18世紀における北京の都市景観と住民の生活世界



地図4：西直門内大街——新街口南街の街路幅（『乾隆京城全図』1750年）

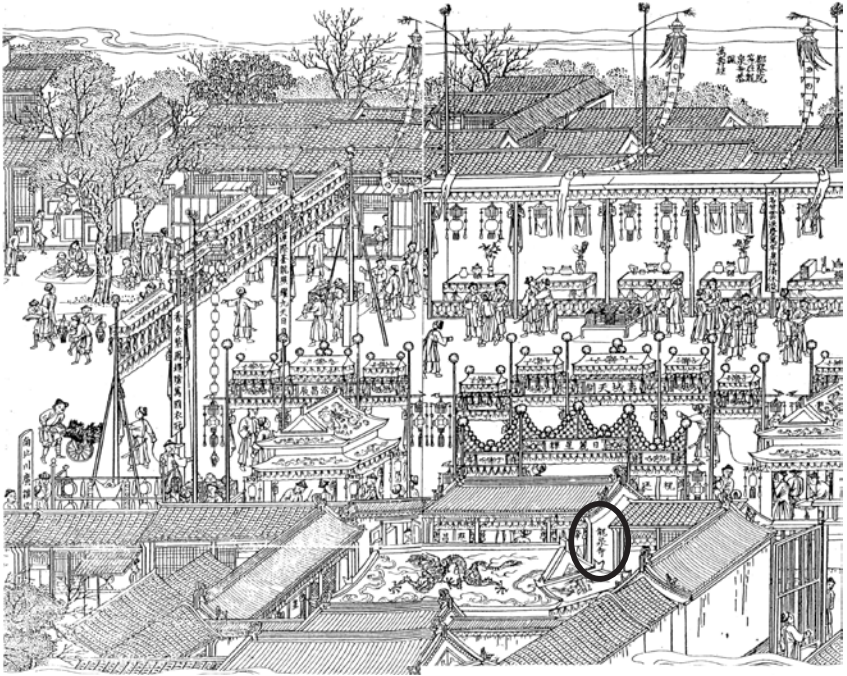


写真3-1：西直門内大街（筆者2008年撮影）

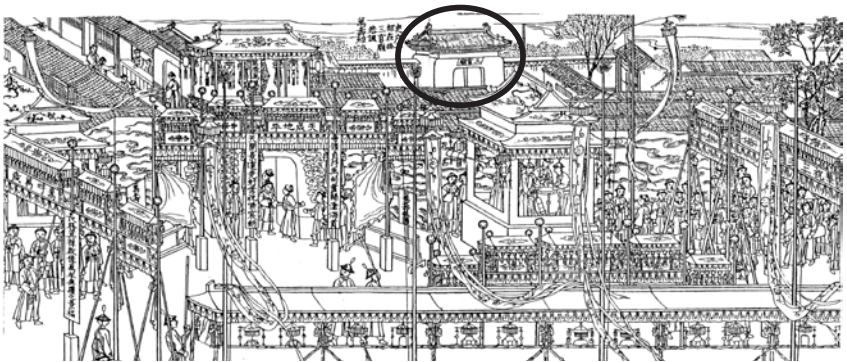


写真3-2：新街口南大街（筆者2008年撮影）

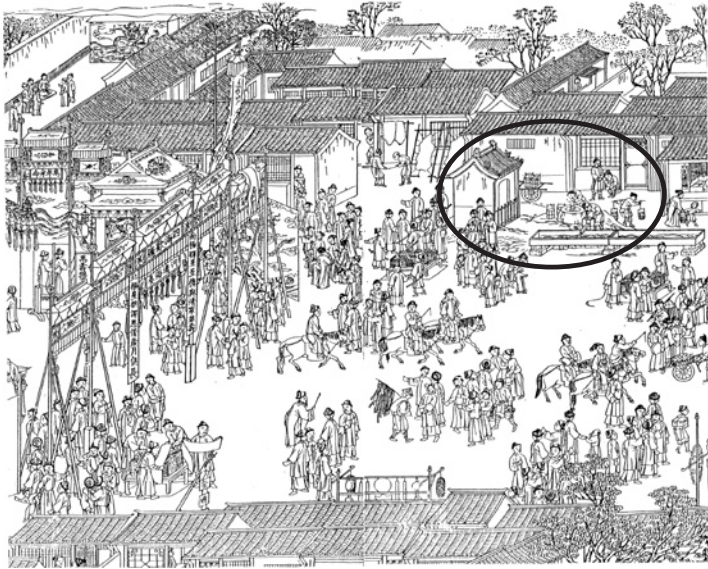
(絵12)。ゆとりがある大通りの両側には井戸や寺などの施設があり、当時の人々の公共空間の一つであったと見られる。また人口が多く集中する地域においては、広い大通りの一角も利用され、臨時の屋台などがあった(絵13)。



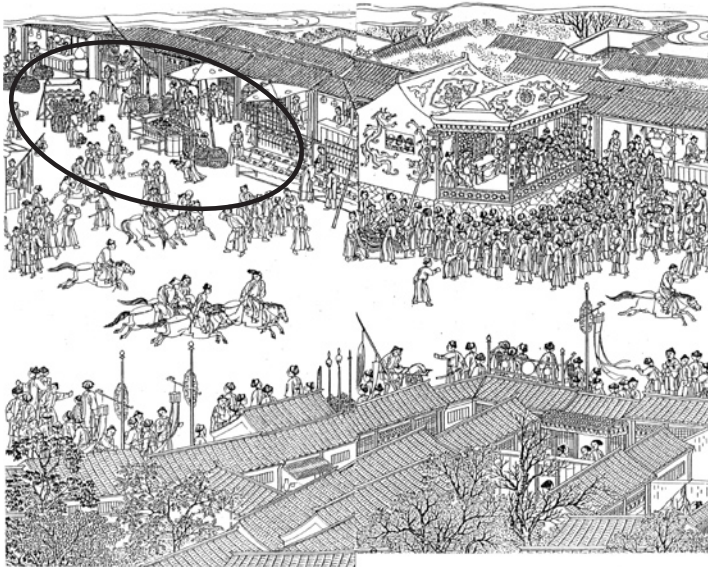
絵12-1：宗教施設——龍泉寺と民居（『万寿盛典図』康熙55年）



絵12-2：宗教施設——三觀廟（『万寿盛典図』康熙55年）



絵13-1：井戸と水屋子（『万寿盛典図』康熙55年）



絵13-2：新街口路上の八百屋（『万寿盛典図』康熙55年）

街頭における人々の移動風景

北京内城の街では、活動の舞台として多くの人々が様々な形で登場していた。『盛典図』の作成は特定の目的があったため、市街の情報の一部は遮断されていたと考えられる。それ故、皇帝の行列と大規模な警備という非日常的な移動を除いて、実際には沿路の日常的な移動は普段より少なかったと推測できる。ここでは、こうした限られた情報からではあるが、街頭における人々の移動風景を垣間見てみたい。

(1) 人々の移動と運搬用具

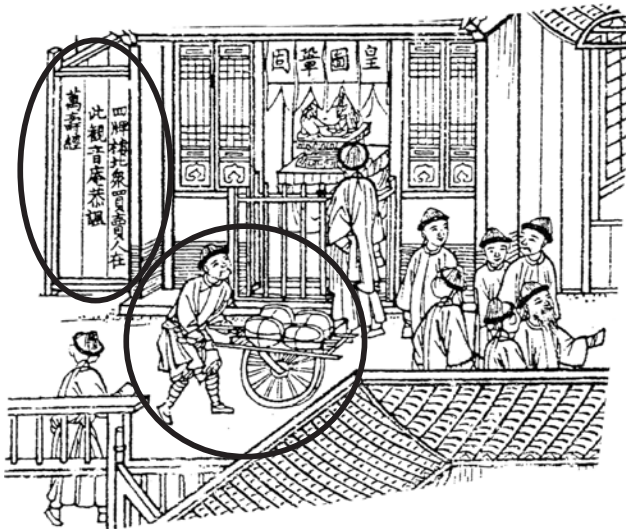
運搬用具の中で、一輪車は、主に日常生活に関わる食材、副食品、生活用水、燃料などを運ぶ際に大きな役割を果たしており、市街の中でものを運搬するのに不可欠な存在であった。『盛典図』にも、内城の大通りの様々な場面に一輪車の姿が現われている。籠、桶等の形とサイズは、様々であり、その多くは天秤棒で担ぐ運搬用具である。

この二種類の人力運搬は、北京の市街の主力の運搬方式である。もちろんものを運ぶ姿は単純な運輸業者のみではなかった。その一部は零細商人であり、彼らは移動商売を行っていた（絵14）。また軽い荷物は道具を使わず、人力で運搬するのが一般的であり、軽い荷物を背負う人々の姿が街のあちこちで見られる（絵15）。

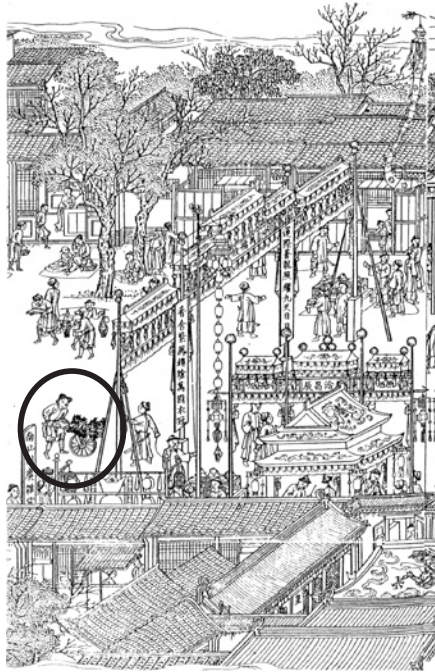
人々の足となる交通手段も『盛典図』には多く見られる。彩色の絵巻を見ると、車はいくつかの種類があった。高級の轎車は、御者と付き人がおり、一般的に貴族や高級官僚の専用ものである。一般用の馬車の形と装飾は轎車と異なっていた。また乗り合い馬車もあった。車の所有形態に即して、個人・家庭専用と営業用の賃貸車（店、個人）という種類があったと推測できる（絵16）。



絵14-1：馬、天秤棒で荷物を担ぐ人々（『万寿盛典図』康熙55年）



絵14-2：ものを運ぶ一輪車（『万寿盛典図』の細部）



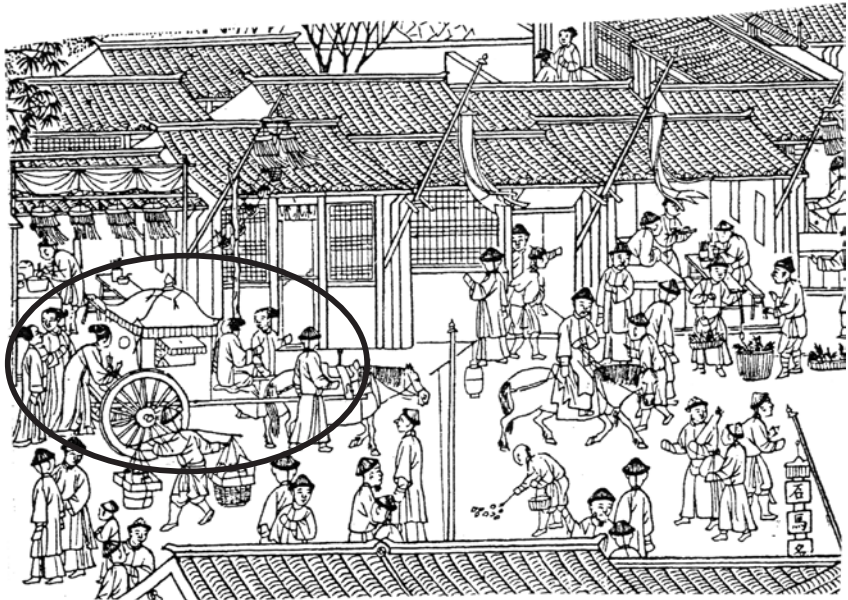
絵14-3：ものを運ぶ一輪車（『万寿盛典図』康熙55年）



絵15-1：小荷物を運ぶ人々の光景（『万寿盛典図』の細部、康熙55年）



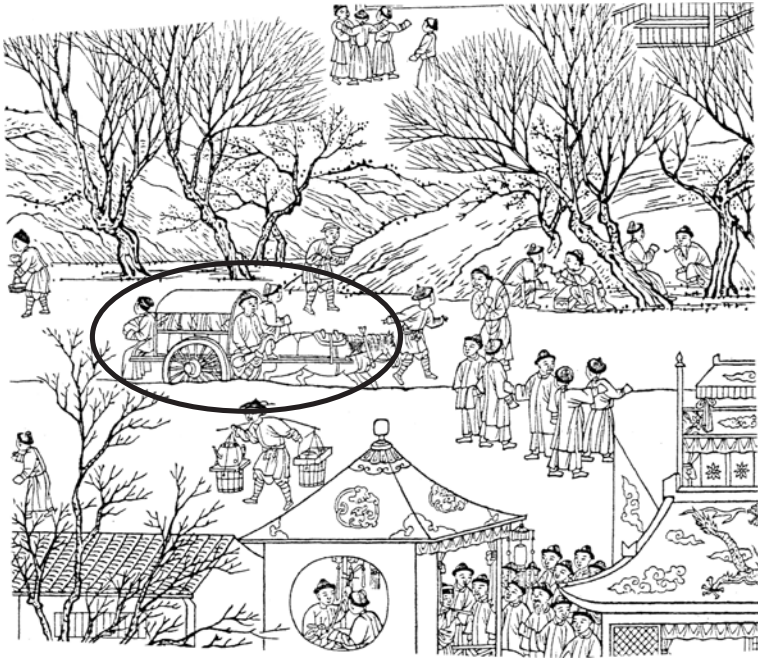
絵15-2：荷物を運ぶ人々の光景（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



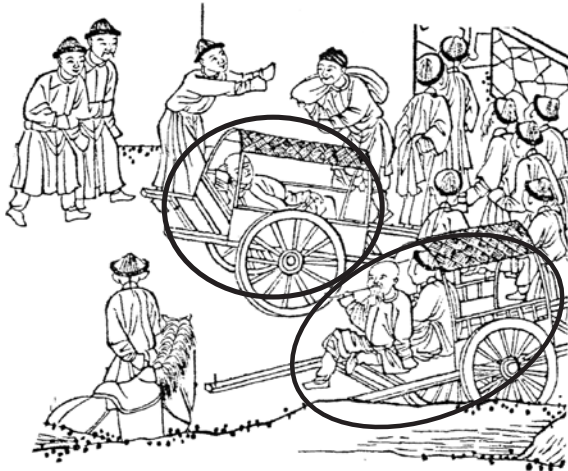
絵16-1：貴族・官僚の専用轎車（『万寿盛典図』康熙55年）



絵16-2 : 「乗合バス」(『万寿盛典図』康熙55年)



絵16-3：「乗合バス」？（『万寿盛典図』康熙55年）



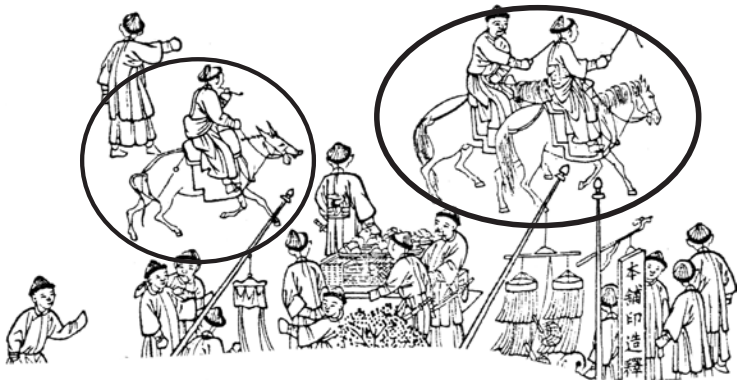
絵16-4：運送業者（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）

(2) 動物

生活が安定する中で、多くの満洲族の人々は小鳥をペットとして飼っていた。しかし、『盛典図』には、皇帝の行列を迎える重要な行事であるため、その姿は見られない。一方で、馬は街頭で多く見られる。皇帝警護隊用の馬と待機の象（絵8-1）以外にも、官僚と民間人が乗っている馬もある。また、「畜力」として、車を引く場合も多い。宮廷専用馬を飼う牧場にも多くの良質な馬がいた。賑わっている大通りの真ん中にある一匹の羊も非常に目立つ。また宮廷牧場のそばに羊が群れになっているのも見て取れる。その他に一般人の乗用馬や乗用ロバもいる（絵17）。また、『盛典図』には描かれていないが、駱駝は、遠距離や重い荷物の運搬に活用されていて、特に北京住民の日常生活の中で不可欠な燃料＝石炭を運搬する場合が多かったようである。



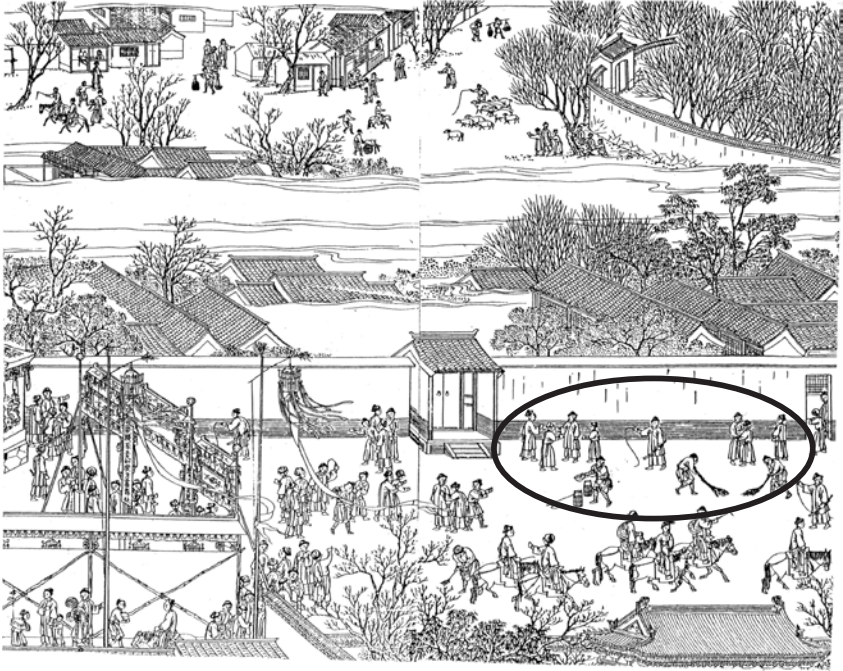
絵17-1：大通りの動物——羊（『万寿盛典図』康熙55年）



絵17-2：大通りの動物——馬とロバ（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）

（3）人々の様々な姿

祝賀に関わる朝廷の官吏，八旗，上京した地方の老人等以外に，皇帝の行列を待ち，見物する地元の住民が多く存在していた。その中でも女性と子供が多くみられるのは，特徴的である⁽⁴⁰⁾。それ以外に，荷物を背負う旅人，杖を持っている朝鮮人，多くの宗教施設および街に現われる僧侶，道士なども姿を見せられている。その中でも一番重要な人間像は，様々な形で日常生活を営む住民，商人，職人，また働いている肉体労働者である。彼らは野菜の売り場でやり取りをしたり，露店で食事をとったり，車や生活用具を作ったり，荷物を運んだり，街道を掃除したり，羊を引っ張ったり，井戸端会議をしたり，おもちゃで子供と遊んだりしている。また，家庭内の仕事，子供の世話，店での商売などを行っている場面も見られる。これは，多種多様な現実の世相を反映したものであり，当時の日常的な社会生活の景観であったと思われる（絵18）。



絵18-1：交通路を掃除する人（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



絵18-2：売買を行なう人々（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



絵18-3：飲用水を売る人（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



絵18-4：朝鮮の使者（『万寿盛典図』康熙55年）



絵18-5：宗教関係者（『万寿盛典図』康熙55年）

住宅区域の商店と看板

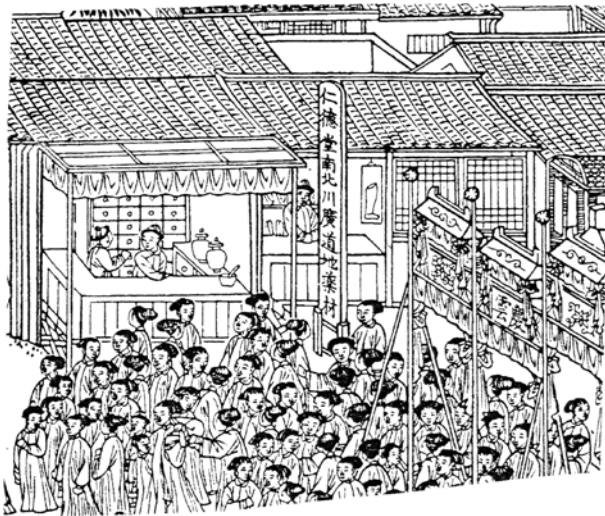
明清時代、とりわけ清代には、北京は中国最大の消費都市であり、市内の商業活動は様々な形で展開され、大通りと小さい胡同において、違う規模の商業街が形成され、商店も各地に点在し、西安門から神武門かでの街、即ち皇城の範囲内でも多くの商店と零細行商があった。『盛典図』に描かれた部分は、北京においても正陽門大街、鼓楼大街、および崇文門大街のような当時商業が最も発達した地域ではなく、北京市内の一般的状況であると考えられる。しかしこの区域に住んでいる八旗の収入は国家財政によって保証され、消費力は高かった。交通の利便性があり、あるいは人の流れが多いところ、例えば、西直門内外、新街口、西四牌楼などでは商売が繁盛し、区域内の重要な商品交易、日常生活用品を賄う経済空間でもあった。『盛典図』では、この区域には商店

が並んでいて、サービス業に関わる多くの人間と場面を見ることができる（絵19）。

街頭で商売を営む小売の業種と方式は様々であり、交通運搬業、占い、おもちゃ商人、飲食店の出前、刃物の研磨・修理、飲み物、おやつなどを扱う零細



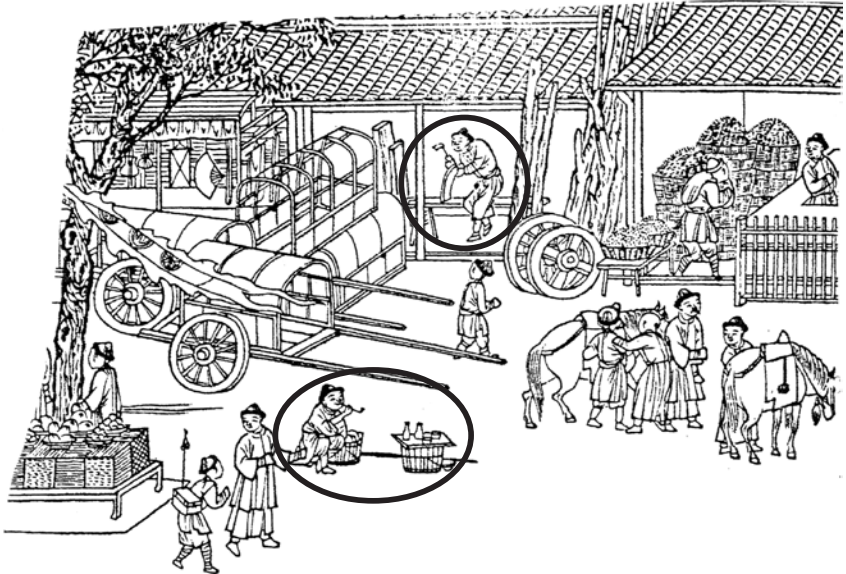
絵19-1：古董屋とタバコ屋の看板（『万寿盛典図』康熙55年）



絵19-2：薬屋と看板（『万寿盛典図』の細部、康熙55年）



絵19-3：雑貨店の看板，占い師（盲人）（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



絵19-4：大八車を作る職人・店，タバコを吸う零細商人（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）

商人が荷物を担いで売る姿は至るところで見ることができる（絵20）。

『盛典図』では大通りの表の一部が隠されているものの、商店、特に絵19のように高く立てられた商店の看板や広告用の施設が多く描かれている。看板等の文字は祝賀施設による遮断、或いは街の南側・西側にあるため、全貌がわからないところがあるにもかかわらず、多くの商業情報が読み取れる。

以下では、描かれた順番（紫禁城外→西直門）から、はっきり区別できる商店の状況を整理し、その種類を抽出してみたい。

紫禁城の護城濠の西北の角付近には、少なくとも四軒の飲食店、二軒のタバコ屋、一軒の靴屋がある。西安門内の慈雲寺の東側に一軒の八百屋、さらに東の胡同の奥に何軒の店がある。西安門内にもタバコ屋、銭荘（両替屋）、薬屋がそれぞれ一軒ある。

西四牌楼付近にはペンキ屋、社塘（煙草）、野菜、調味料、酒、衣料品、飲食、タバコ・菓子、米穀に関連する店がそれぞれ一軒あり、商売内容が不明である「広源号」と「信実」という名の店もある。

双関帝廟の向こうには、煉炭の生産・販売をする店、生活雑貨、酒・調味類、野菜、印章彫刻（李家印）、陶製容器などを扱う店がある。

真武廟の南側には、酒、南式（南方）菓子の販売、桶等の生活木器の製造・販売、タバコの販売、毛皮の製造・処理を行う店がある。

観音庵の向こうには、薬屋、「面店」（麦粉）、調味料、南方の野菜・副食を売る店、練炭の生産・販売をする店、「蒲城」（煙草）を扱う店がある。

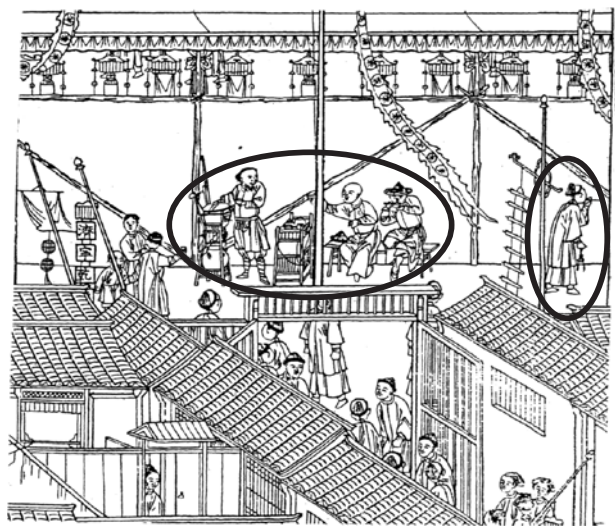
般若庵の向こうには、菓子、食品、衣料、家具の加工・販売、茶葉、衣料に関する店が並んでいる。

西方寺の向こうには、飲食（餛飩）、衣服の仕立て、野菜、薬材、食糧、車の生産・販売、菓子、煙草に関する店がある。

宝禪寺の向こうには、朝鮮人参、薬、建築材料（煉瓦）、衣服の仕立て、野菜、線香、石鹸、菓子に関する店、寺の北側には書籍（仏経）の出版・販売を行う



絵20-1：玩具商人と子供（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）



絵20-2：露店と食事，タバコを吸う人（『万寿盛典図』の細部，康熙55年）

店がある。

関帝廟の向こうの北側には、診療所、衣料、線香の生産・販売をする店や食料品、蘇式菓子などを扱う店がある。

新街口の丁字路の東側には、銭荘や衣料品、薬材、生活雑貨（はさみ、櫛）、衣服縫製、酒を扱う店が、西側には「信実通商」という店が、北側—西直門方向には、銀局や肉、食糧、菓子、生活雑貨、薬、煙草などを扱う店がある。

新街口—西直門大街の南側には、両替屋、「信実傾銷」、「聚宝齋」といった店や酒などを扱う店がある。

西直門内大街の石橋周辺には、「天宝齋」（古董屋）、「勝蘭齋」、「華国楼」（宿泊施設？）といった店、煙草・線香の製造・販売を行う店、酒屋、銀局、成衣局（服装の仕立て）などが多く見られる。

三官廟の西の南北側には、「川広雑貨」、「石馬名煙」、「濟寧幹糸煙」（タバコ屋）、「杏仁堂」、「社塘煙」、「通商銀舗」、「甘露居」（線香）、「大興号」、「益美号百文小当」（質屋）、「専写各省驢騾」（交通運輸業、或は仲介業者）、「余塘高煙」（タバコ屋）、「文物古玩」、「本堂發兌官揀人參」（朝鮮人參）、「濟寧幹糸」といった店や飲食店、顔料・雑貨を扱う店などがある。

西直門内の近辺には、「浦城名煙」、「浦城社塘所煙」、「子淨棉花」、「三鮮大面」、「余塘高煙」、「如松客店」、「南北車輛」、「××高煙」といった店や銀局、酒・薬酒を扱う店がある。

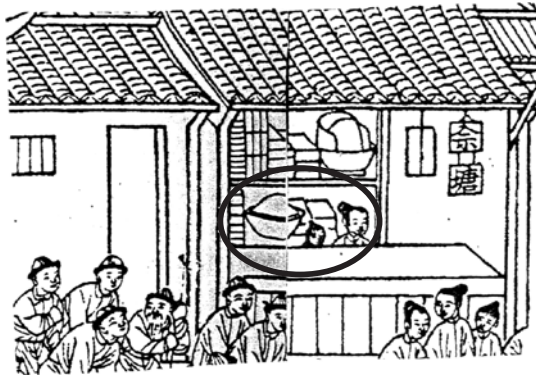
以上の内容を見てみると、種類から見れば、食料品、新鮮な野菜、調味料、酒、生活用燃料、雑貨、衣料品、医療関連の物品、家具を扱う店や銀局、質屋、佛教等関連の備え品、嗜好品、古董を扱う店、交通に関わる店、旅館などといった日常生活消費に関わる店舗があることが確認できる。しかし、これらの店は、祝賀施設に遮られず、内容が大体識別、或いは推測できる部分であり、市街の一部の商店にすぎない。

次に注目できることは、祝賀施設と飾りに遮られている街ではあるが、多く

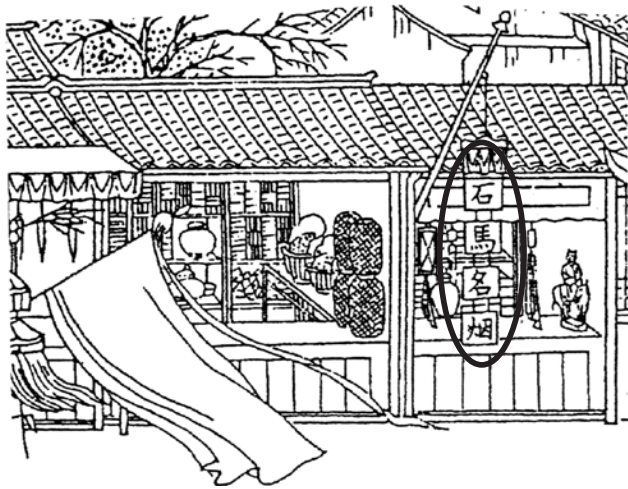
の商店・商売用の広告看板、大きな商店の名札が立てられたり、掛けられたりしていることである。これらの看板の形は様々であり、建物より高いものが多く、遠くから見るができるものであった。しかも大通り表側に面する建築には、宗教施設、また少数の住宅を除いて、商店、商店兼製造工房、旅館などが長く建ち並んでいた。その中でも、西直門内、新街口、西四牌楼付近はとりわけ賑やかな商店街であった。

さらに北京住民の日常生活に関するものでは、遠距離の空間移動と流通に関する旅館、車両、ロバなどの交通手段を経営する店、南方の貨物を扱う店が多く存在していることが確認できる。また、商号のような総合的な問屋もあった。その中で最も多い店は、嗜好品の煙草であった。煙草消費に関する清代の記載は少ないが、『盛典図』は多くの情報を提供している。『盛典図』には煙草を吸う場面がたくさんあり、社会の上層階級だけではなく、旅人、一般の商人、労働者も愛用していたようである。これは煙草が性別と関係なく広く社会層の日常生活の嗜好品として定着していたことを示している。また「石馬名煙」、「蒲城」、「浦城名煙」、「社塘」、「余塘高煙」、「浦城社塘所煙」、「濟寧幹糸」、「濟寧高煙」という看板・広告から煙草の産地や煙草のブランドなどの情報もわかる。「石馬」は福建省漳州海澄県の地名である。「蒲城」、「浦城社塘」、「余塘高煙」、「社塘」は二つの異体字、或いは当て字を含む。「蒲城」、「浦城社塘」とは、福建省浦城県のことで、「余塘」と「社塘」は余・社の発音が同じであり、福建省の浦城県社塘であると考えられる。ここは、実際煙草が最初に伝来した地域であった。また、「濟寧」は山東の濟寧である。このことから、当時北京の煙草市場は、『盛典図』から見れば福建産、そして山東産のものが主であったことが分かる（絵21）。

以上の資料と社会現象は、北京の社会経済状況の構造的分析にとって非常に重要であると思われる。ここで詳しく分析できないが、いくつかの問題点を指摘しておきたい。



絵21-1：タバコ屋の女性と子供（『万寿盛典図』康熙55年）

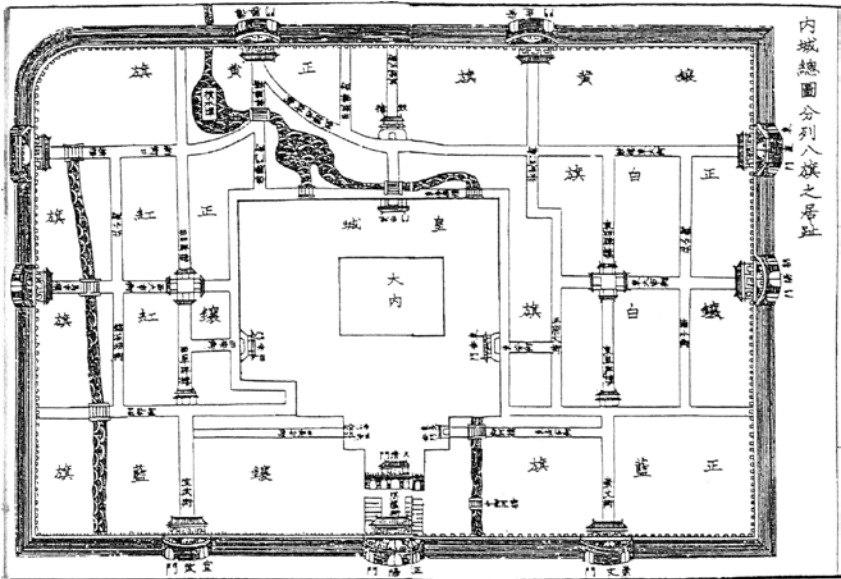


絵21-2：タバコ屋（『万寿盛典図』康熙55年）

まず、一般に学界では清朝、特に清末まで「満漢分治」政策が徹底的に実施され、北京の内城には漢族の人々は住むことができなかつたとされているが、『盛典図』の中の大通りに面する街の表には多くの商店、飲食店、両替屋、質屋、旅館等が見られ、荷物の運搬、車の運転手等の従業員、手工工場の労働者、職

人が大勢存在していることが分かる。彼らは北京の内城のいたるところでサービス業に従事していて、遠い城外に住まずに、店舗の奥、或いは関連した家屋に住み込んでいたと考えられる。

確かに満洲族は清朝を樹立し、漢人を内城から追い出し、満洲族等の軍隊と家族を各区域に配置し(地図5)、内城では漢人の居住を禁止する政策を実施し、順治3年(1646)からは「満漢分治」政策の執行が厳しくなった。しかし、清朝政府は、同時に人数が少ない満洲族の軍事力と政権のコントロール力を維持するために満洲族を優遇し、兵士と官僚を除いて北京内外に住んでいる満洲族に対して、「農工商」などの職業への従事を厳禁していた。国家の財政に頼った満洲族等は、兵士でも一年の収入は、当時、大体厳しい科挙競争に成功した知県レベルであり、家庭内外の労働は主に使用人等に任せていた。これにより実際是北京城内の日常生活レベルにおいて大きな矛盾が生じていた。即ち数十



地図5：清代における北京内城の八旗の駐地分布（『唐土名勝図会』，19世紀初）

平方キロメートルの北京内城に住んでいる数十万人の八旗の將校・兵士およびその家族に対して、日常生活のサービスを提供する人々が数多く必要とされたわけである。結果として商店等を含むサービス業の経営者・労働者、職人には、主に満州族以外の漢族等の人々を使わせざるを得なかった。これは、北京の内城に多くの漢人が住み込んでいた原因でもあった⁽⁴¹⁾。

次に商店と商品から見れば、蘇州、広東、四川等の南方の副食品、食材等を販売する店が多くみられる。それは、商品流通の情報を示すだけでなく、生活習慣の側面から見れば、北京の内城にも多くの南方人が何らかの形で住んでいたことを示唆するものである。

また、銀局や銭荘が市内、特に市街の中心地域には多く存在していた。銀局や銭荘は貸し付けを行う金融業者であるが、今日の銀行のように広範に預金を集めるようなことをせず、両替業務を基本としていた。住民の日常的交換のための銀と銅銭の両替だけではなく、各地域から来る旅人に利便を与えていた。流通する銀の純度・銅銭の使用のされ方などに地域ごと、業種ごとに差異があったからである。

城内と郊外

城内と郊外の関係について、城壁内外の関係、城門・出入口の内外の関係、各城門の比較などを行う作業は、中国伝統都市の性格を探る上で重要な課題である⁽⁴²⁾。明清時代、北京の各城門の中では、正陽門、西直門、朝陽門、崇文門等に関する画像、写真資料は多く残っている。こうした城壁、城門およびその内外関係についての研究も重要であるが、その分析は後日に譲りたい。

五、おわりに

以上、本稿では、『盛典図』の成立経緯、史料価値、そこから見た北京の景

観と住民の日常生活に関わるものについて検証してきた。『盛典図』の成立は康熙帝の60歳の誕生日という特殊の事情があるため、祝賀を中心とする非日常的場面が多かったが、住民の姿、商店および経営の内容、市街の道路、街の景観などを含む日常的情報を多く提供していることが分かる。また、絵という直観的表現手法は、一般の文字資料で説明・表現しきれない北京市街の様態をわかりやすく立体的に描き出していることも分かる。『盛典図』の祝賀という非日常的要素を取り除き、八旗の兵士やその家族を含む多くの住民の日常生活に関する情報を加味し、現在残っている伝統景観区域の都市建築・生活空間などの史料を参照すれば、内城の市街像を検出することができる。

なお、本稿では、家屋、商店、宗教施設、各種の道具、人々の活動の一般の様態などを確認しただけで、関連した建物、道路等の具体的立体状況、空間構造に関する分析と構築の作業は殆ど行っていない。また、『盛典図』に描かれた部分は、北京内城の市街の一部の地域にすぎない。本稿では、現在、「中国のシリコンバレー」といわれ、大学教育・科学研究の中心的な地域となっている北京西北の郊外地域に関しては殆ど触れていない。こうした部分の検証は今後の課題である。

『盛典図』からは、皇帝の通過経路の両側には多くの祝福施設と塀が立てられ、装飾されていることが分かる。康熙帝の60歳の誕生日の前日には大きな儀式が行なわれ、沿路では「清道」はせず送迎者と地元住民等の見物も許されていた。これは、意図的な視覚化である。こうした作業は、儀式の効果を最大限に高めた。そして式典を絵などで記録して出版する目的は、皇帝の偉業と高い人徳を讃えるのみならず、天下秩序、朝廷政治の安定、維持等の秩序化への効果を最大限に高めることになったと思われる。しかし『盛典図』と当時の文献とを検証してみると、『盛典図』に描かれた西北郊外は、全く「虚構の繁栄」であり、内城の市街も「粉飾の街頭」という色彩も濃い。こうした祝典の中に現われる「虚構の繁栄」と「粉飾の街頭」は、単なる都市の景観だけではなく、一つの

当時の精神構造となっていて、まるで幽霊のように中国社会に対して大きな影響を与えつつあったのではないか。

[附記]：本稿は、財団法人トヨタ財団研究助成金（D06-0422）と文部科学省科学研究費補助金（基盤（C）21520728）の研究成果の一部である。本稿の一部の内容を、東京大学の都市史研究会主催のラウンドテーブル「伝統都市の残照」（2009年2月21日）で報告した際には、東京大学文学部の吉田伸之・吉澤誠一郎の各先生、東京大学工学部の伊藤毅他の諸先生より様々な貴重なご教示を頂戴した。記して感謝の意を表したい。

- 1 金埴は『不下帯編』に「絵雪者不能絵其清，絵月者不能絵其明，絵花者不能絵其馨，絵鳥者不能絵其声，絵人者不能絵其情，語言文字故不足以尽道也」と述べて、人間が者に関する表現の手段には各々限界があると指摘した。（『不下帯編』（中華書局1982年）巻2P29）。
- 2 社会の変化に対応しながら、歴史学は様々な新しい側面を探求し、現在、従来には考えられなかった音声、におい等の領域に関する研究が現れている。例えば、A・コルバン『においの歴史——嗅覚と社会的想像力』（藤原書店1990年）、『音の風景——音と人間社会の歴史』（藤原書店1997年）参照。
- 3 関連整理は、熊遠報『18-20世紀における北京のライフラインと都市の社会経済構造に関する研究』文部科学省・科学研究費補助金・研究成果報告書1-111、2008年3月、また邱国盛「百年北京史研究綜述」（『北京社会科学』2002年第3号）参照。
- 4 日本の都市史研究の中で20世紀90年代以降、伝統都市の分節構造に関する研究は重視され、多くの成果も世に問った。吉田伸之『伝統都市・江戸』（東京大学出版会2012年）、吉田伸之・伊藤毅『伝統都市』1-4巻（東京大学出版会2010年）等を参照。
- 5 この絵は中国歴史博物館に所蔵している。王宏鈞氏は関連の紹介と研究を行なった（『歴史教学』1962年第7-12号を参照）。
- 6 この図は仙台の東北大学図書館に所蔵している（新宮学氏『北京遷都の研究』図版を参照。汲古書院2004年）。
- 7 康熙帝『南巡図』は故宮博物院蔵文物珍品全集『清代宮廷絵画』（香港商務印書館1996年）を参照。

- 8 徐揚『京師生春意図』は、故宮博物院蔵文物珍品全集『清代宮廷絵画』（香港商務印書館1996年 P242）を参照
- 9 『万寿盛典図初集』（以下『初集』と略称）巻11では沿路は数十里とある。これによってその距離は20キロ以上あることが分かる。
- 10 Niewhoff Johan, *L'Embassade de La Compagnie Orientale des Provinces unis vers L'Empereur de la Chine*, Amsterdam, 1665. Alexander William, *The Costume of China (Picturesque Representations of the Dress and Manners of the Chines)* London, 1814. 明清北京に関する西洋版画の関連資料について李弘『京華遺韻——西方版画中的明清老北京』（新世界出版社2008年）を参照。
- 11 何伯英著、張閔林訳『旧日影像』（東方出版中心2008年）を参照。
- 12 小川一真は北京に関して多くの写真を撮り、出版した。『北清事變寫真帖』（小川一真出版部1901年）、『清國北京皇城』（小川一真出版部1906年）などが。山本讃七郎が撮ったガラス看乾板写真の一部は東京大学東洋文化研究所に所蔵されている。『Picturesque Views of Peking』（山本照相館1901年）と『Peking』（山本照相館1909年）等写真集がある。
- 13 中国関連、特に北京関連の数千枚の写真は主にオーストラリアの Mitchell Library in Sydney に所蔵されている。その一部は最近出版されている。赫達・莫理循著『洋鏡頭里的老北京』（北京出版社2001年）、瀋嘉蔚編『莫理循眼中的近代中国』（福建教育出版社2007年）等を参照。
- 14 『残冬京華図』は日本の第一法規出版による公刊、1988年。ほかの作品は雲南人民出版社による出版。1995年）。
- 15 19世紀末以降、北京に関する撮影作品は、単品の写真のみならず、書籍、新聞、雑誌に載せる等の様々な形で多く残っている。小川一真、山本讃七郎、モリソン等のように一部の写真が編集され出版したものがあり、アメリカ人社会学者の Sidney David Gamble のように、北京調査を行なう際、撮った約5000枚の写真と数時間の映画フィルム等は、一つのコレクションとしてプリンストン大学東アジア図書館に所蔵されているケースもある。また19世紀の末から20世紀前半にかけて、多くの外国語と漢字新聞に載せた膨大な量の北京関連写真がある。しかしこうした膨大な量の写真について、どこにどのような形態でどのくらい残り、所蔵されているのか、関連の統計数字や詳細の情報がなく、系統的整理もない。
- 16 今西春秋「乾隆京城全図解説」（興亜院華北連絡部政務局調査所、1940年）参照。
- 17 最近飛躍的に発展してきた Google の遡及的都市画像検索（アメリカの1940年代に上る）は非常に先進的技術であり、その基盤は写真と歴史の研究の成果である。

- 18 『万寿盛典初集』巻40。
- 19 版画，絹に描いた彩色の絵巻は，原稿に基づいて王原祁の弟である王奕清の手を経て康熙55年に最終的に完成した。
- 20 故宮博物院藏文物珍品全集『明清風俗画』（商務印書館，2008年）。
- 21 『万寿盛典初集』巻40。
- 22 『万寿盛典初集』奏折，特に王原祁の上奏文では絵図を文字記録（起居注）と並んで歴史資料として扱った（『万寿盛典初集』奏折，また巻40参照）。
- 23 聶崇正「清代宮廷絵画導言」参照。故宮博物院藏文物珍品全集『清代宮廷絵画』（商務印書館，1996年）。
- 24 『万寿盛典初集』巻40。
- 25 『万寿盛典初集』巻40，王原祁康熙52年12月の上奏文。
- 26 『図』に関して，小野勝年・瀧本弘之両氏の研究を参照。小野勝年「康熙万寿盛典図について」（『佛教芸術』67号，1967年），同「康熙六旬万寿盛典について」（『田村博士頌寿東洋史論叢』同朋舎，1968年），同「康熙万寿盛典図考証」（『ビブリア』52号，1972年）。瀧本弘之「『康熙六旬万寿盛典図』初探」（『清朝北京都市大図典』遊子館，1998年）。
- 27 『万寿盛典初集』巻44，P10。
- 28 『万寿盛典初集』巻44，P14。
- 29 著作権などによって絵巻を掲載できなかったが，絵4-1，絵4-2のカラーテキストは，北京の春を反映している。また文献の中にも三月に「桃花歷乱，柳絮飛残」とある（『帝京歳時紀勝』，北京古籍出版社，1981年，P17）。
- 30 朱一新『京師坊巷志稿』上の「西大市街」に「街心有観音庵，俗称当街廟」とある（『京師五城坊巷胡同集・京師坊巷志稿』，北京古籍出版社，2001年，P139）。周家楣・繆荃孫等『光緒順天府志』「京師志・坊巷上」に「西有双閼帝廟，街心有小廟，俗称当街廟」とある（北京古籍出版社，2001年，P373）。
- 31 『光緒順天府志・京師志十三・坊巷上』「西安門大街」「北為陽澤門，門内傍北海，地名小馬圈」（P341），「小馬圈…今改為内厰，豢養御馬」（P342）。
- 32 その理由は「以臣民北面仰瞻」という臣民としての基本的姿勢である（『万寿盛典初集』巻43，P1）。
- 33 上巻，『故宮博物院展：紫禁城の宮廷芸術図録』（西武美術館・朝日新聞社，1985年）。下巻，「康熙帝万寿図」という名が付けられた。故宮博物院藏文物珍品全集『明清風俗画』（商務印書館，2008年）。
- 34 初集巻10の記載によれば，各地に駐屯する八旗系統の兵士・官僚等を除いて，各

- 地域から上京した老人は4275名いた。
- 35 視点と方向性は微妙に異なっている。
- 36 『唐土名勝図会』（ペリかん社、1987年）に関する研究は神田信夫「序」、徳田武「唐土名勝図会解説」、石橋崇雄「唐土名勝図会について」を参照。
- 37 西太后の祝典に関する朝廷と地方行政機関の直接支出は、銀600万両で、当時清朝政府の財政収入の十分の一に相当する。祝典の全体の支出は1000万両を上回ったと言われている。李鵬年「一人慶寿、挙国遭殃」（『西太后』、紫禁城出版社、1985年）参照。
- 38 夜のある時刻になると城内の各柵門が一切閉められ、人々の移動空間が制限される。
- 39 2008年12月28日に筆者は西直門から景山までの康熙帝の経路を踏査した。西直門内大街、新街口南大街、西北北・南大街、西安門大街等の道幅は、それぞれの地域内同じであるが、それぞれの大街は約20メートルから約35メートルと異なっている。新街口の曲り角は絵より狭い。
- 40 旗人の女性は主に八旗の家族として内城に住んでおり、内外多くの束縛を受ける漢人女性と異なり、日常的に屋外の活動は多い。
- 41 康熙54年に満洲族の官僚頼温は秘密の上奏文で内城の漢人を厳しく取り締まることを提言していた。第一歴史档案館『康熙朝満文朱批奏折全訳』（中国档案出版社、1984年）P1008。
- 42 食糧の供給という視点から郊外である通州の漕運港に関する研究は、拙稿「漕運港と北京の食糧供給——清朝の北京郊外を中心に——」（『別冊：都市史研究：水辺と都市』、山川出版社、2005年）参照。

参考文献

『万寿盛典図』（康熙55年、1716年）

『乾隆京城全図』（乾隆15年、1750年）（昭和15年興亜院華北連絡部政務局調査所、北京燕山出版社1986年）

『乾隆八旬万寿盛典図』（乾隆57年、1792年）

康熙『万寿盛典図』絵巻の上巻（『故宮博物院展 紫禁城の宮廷芸術図録』、西武美術館・毎日新聞社1985年）

康熙『万寿盛典図』絵巻の下巻（故宮博物院蔵文物珍品全集『明清風俗画』、商務印書館2008年）

故宮博物院藏文物珍品全集『清代宮廷繪畫』（香港商務印書館1996年）

岡田尚友『唐土名勝図会』，19世紀初刊

『北京城市歴史地理』（侯仁之他編，北京燕山出版社2000年）

『殘冬京華図』（王大観，第一法規出版株式会社1988年）

『北京——都市の空間を読む』（陣内秀信・高村雅彦他，鹿島出版会1998年）

『清代北京旗人社会』（劉小萌，中国社会科学院出版社2008年）

18世纪的北京景观与居民的生活世界

——以康熙六旬《万寿盛典图》为中心——

熊 远 报

本论文利用为康熙皇帝（1654—1722）六十大寿庆典编制的《万寿盛典图》的图像资料与文字说明，参照各种明代以来的相关图绘、地图以及1860年以后的庞大照片资料，力图直观地还原18世纪前期的北京的一部分街区景观，立体地重构当时城内居民的日常生活环境与状态。

作为皇帝六十大寿盛大庆典的一环，兵部侍郎宋骏业等组织大批画家于康熙52年（1713）3月18日分赴北京城内外各路段写生，以绘画的形式记录了皇帝车驾从畅春园至神武门之间接受祝福的场景，编制了康熙皇帝自己也认可的《万寿盛典图》。画中描绘了从西北郊的畅春园经西直门、新街口、西四牌楼、西安门、北海玉簌桥、景山至紫禁城沿途的人物、动物、植被、建筑和城市设施，仅入画面人物不下2万，各职业、各年龄、各场景的人物活动在长卷中都得到反映。这次庆祝活动无意间留下了北京西直门至紫禁城间沿途非常珍贵的街区与居民的生活景观史料。这一纪录现存三种版本，本论文结合其他文献与地图资料，首先确认其成书的过程、记录的真实性与史料价值，在此基础上讨论了其所描绘的景观中的日常性与非日常性，对固定不动的景观与移动的街头，以及居民的日常生活，尤其是各种各样的商店等进行了梳理，并指出当时的仪礼空间与“虚构的繁荣”、“粉饰的街头”这一扭曲的精神结构对后世中国的影响。